KYOKY 116

特　集

# 実践的指導力を培う新しい実地教育科目

## ー教育課題研究実地演習・学校インターンシップ研修ー

京都教育大学

＜表紙＞

附属幼稚園

うきた　ゆうき、こうじな　えいか

“海の中”というイメージ、二人で描くのだという思いをもって、それぞれに描きはじめていきました。隣で描いている相手の様子を見たり、感じたり、ことばを交わしたりしながら、“二人の海の中の世界”がだんだんできあがっていきました。

ゆうき「これ、サメやし」
えいか「うん」
ゆうき「何、それ？」
えいか「・・・宇宙人」
ゆうき「えー！」

できあがった画面を見て、保育者とはこんな事を話しました。

ゆうき「これ、シャチ。肉食べるし」
保育者「えー！じゃー、この人逃げているの？」
ゆうき「うん。これ、日本の船」
保育者「どこへ行こうとしているのかな？」
ゆうき「アメリカ。アメリカのディズニーランド」
保育者「小さな魚がいっぱい集まって泳いでいるね」
ゆうき「獲物、探してんの」
えいか「人魚ひめ（描いた）」
保育者「虹みたいにきれいな色だね。この人魚はえいちゃん？」
えいか「うん。これがえいちゃん。これはお母さん」

(財)大学基準協会
認定マーク

このマークは，大学基準協会の定める大学基準に適合した大学が使用できるマークです。

# CONTENTS

広報第１１６号

＜表紙＞　附属幼稚園
うきた　ゆうき、こうじな　えいか


## 特集

2　**実践的指導力を培う新しい実地教育科目**
**－教育課題研究実地演習・学校インターンシップ研修－**
実地教育運営委員会
高乗　秀明
梶原　裕二

## 海外見聞録

14　**上海師範大学国際芸術祭に参加して**
国際交流委員会副委員長
田中　多佳子

## 研究余滴

16　**「自分のことは自分でしない」**
**－子ども臨床社会学のすすめ－**
保健体育講座教授
杉本　厚夫

## 京教今昔物語

18　**学校行事とともに**
附属京都中学校教諭
垂井　由博

## 京教学内探訪

20　**今、環境教育実践センターでは**
附属環境教育実践センター教授
梁川　正

## 留学生の声

22　**違いを求めて**
平成16年度日本語・日本文化研修留学生
MOROZOVA, ANTONINA YEVGENIVNA
（モロゾワ、アントニナ　エフゲーニフナ）

## 附属学校園だより

23　**楽しい学校になるようにみんなでがんばります！－児童会の取り組み－**
附属桃山小学校副校長
川端　建治

24　**全校縦割り活動「春の仲良し遠足」**
附属京都小学校副校長
多田　光利

25　**はじめての沖縄修学旅行**
附属桃山中学校副校長
多羅間　拓也

26　**総合学習で日本の文化に触れる**
附属京都中学校副校長
橋本　雅子

27　**サマー・プログラム　ＰＡＲＴⅡ**
附属幼稚園副園長
川端　智江

28　**マレーシア研修旅行**
附属高等学校副校長
斉藤　正治

29　**今年も夏は、ワークショップ**
附属養護学校副校長
小竹　健一

## 非常勤講師から

30　**自然へ、自然に**
美術教育非常勤講師
建田　良策

**「自立」に思うこと**
障害児教育非常勤講師
高田　薫

## 卒業生の声

31　**本当に貴重な2年間**
京都市立上高野小学校教諭
奥野　利一

**心を動かす授業を目指して**
大阪女学院中学高等学校教員
加茂　祐介

## 原稿募集・編集後記

32　地域連携・広報委員会委員長
武蔵野　實

# 実践的指導力を培う新しい実地教育科目
## －教育課題研究実地演習・学校インターンシップ研修－

実地教育運営委員会　高　乗　秀　明
同　梶　原　裕　二

1．はじめに

「研修が始まってすぐは、本当に何をしてよいのか、この10日で何が変るだろうか・・？と思っていた。しかし、一日一日を振り返ると、自分の考えを改めたり、当たり前の大切なことに気づける研修だったと思う。・・・・

今後の課題としては、子どもと多く関わることでその子ども一人ひとりのよさに気づき、その子どもの持つ可能性を伸ばす、そのような影響を与えられる人になることである。そのためにはやさしさで関わるだけでなく、きびしさを持ち、その中に面白さを見いだしていくことが必要だと思う。そういうことが教育に携わる人としての責任であり職務の根っこにあるのではないかと思う。信頼関係という言葉で固く考えていたが、根底にあるものは人と人との間にある心と心のふれあいであるということにも気づくことができた。子ども一人ひとりと本気で向かい合い、根気よくつき合い、そして時には叱る勇気や挑戦していく勇気を持つこと、この3つの気持ちを忘れないことが、私自身の今後の課題になっていくだろうと思う。」

これは初年度（平成14年）に「学校インターンシップ研修」を行った発達障害学専攻4回生田中香織さん（現在は京都市立東総合養護学校教諭）の研修後の振り返りの文章の一部です。

今、さまざまな教育課題の解決のために教育改革が進められていますが、制度や教育方法・内容の見直しと同時にテーマとなっているのが教員の資質の向上を図るための方策です。そのキーワードが「実践的指導力」ですが、それを支える資質として一般的に言われているのは、豊かな人間性、広い社会性、高い専門性であり、さらに、教職への使命感、情熱、そして、児童生徒と信頼関係を築ける適格性です。

本学では教員養成大学として、これらの資質・能力を培い、それを実践的指導力に高めるために、学校教育現場での教育課題と教職への理解、さらに、自らのあり方を省察する新しい実地教育に取り組んでいます。

2．実施の経緯

学生の実践的指導力の育成は教員養成系大学における重要な課題の一つです。本学学生の実地教育のカリキュラムとしては、必修科目として附属学校での「観察・参加研究」「主免・副免実習」、選択科目として本学での「子どもふれあい教室」の他、公立学校では「オプション（母校）実習」「学校教育相談実習」等、課外活動としては「スクールボランティア活動」等があります。しかし、公立学校での実地教育の場は必ずしも十分とは言えません。そこで、京都府教育委員会、京都市教育委員会との連携協力の下、平成16年度から「教育課題研究実地演習」と「学校インターンシップ研修」という2つの授業科目を開講しました。

今回の授業科目の設置に先導的役割を果たしたのは「学校インターンシップ研修」です。平成14年度から京都市教育委員会と連携して実地教育運営委員会の事業として始めたこのプログラムは、学生が学校教育現場でさまざまな体験を得る貴重な機会を提供してきました。参加学生、受入れ校のいずれの評価も高く、表1のように、研修校・参加学生数共に毎年増加し、平成16年度からは授業科目として実施することとなりました。

「教育課題研究実地演習」は京都府教育委員会との連携で平成16年度から新設の授業科目として始まりました。平成15年9月、京都府教育委員会から養成段階における実践的指導力の育成と京都府の教育の理解を深める事業「教員養成サポートセミナー」を本学と共同で実施したいとの提案がありました。その後、この事業の趣旨や実施形態、内容等について、府教委、山城教育局、城陽市・京田辺市教委、担当小学校長・指導教諭と実地教育運営委員会との間で話し合いが持たれ、具体化に向けた協議が行われました。その結果、府教委での事業名「教員養成サポートセミナー」を、本学では教育現場での課題を受講学生が各自で設定し、専任教諭の指導を受けながら学校現場で演習を進める「教育課題研究実地演習」という授業科目として実施することとしました。そして、表2の2校で演習を行うこととなりました。

表１　「学校インターンシップ研修」
研修校・研修学生数一覧表

| | 学　校　名 | H.14 | H.15 | H.16 | H.17 |
|---|---|---|---|---|---|
| 小学校 | 白川小学校 | 2 | 2 | 1 | 2 |
| | 太秦小学校 | 2 | 2 | 1 | 2 |
| | 山王小学校 | 2 | 2 | 2 | 2 |
| | 錦林小学校 | 2 | 2 | 1 | 2 |
| | 洛央小学校 | 2 | 2 | 2 | 2 |
| | 新町小学校 | | 2 | 2 | 2 |
| | 朱雀第四小学校 | | 2 | 2 | 2 |
| | 藤城小学校 | | 2 | 2 | 2 |
| | 伏見板橋小学校 | | 2 | 2 | 2 |
| | 向島藤ノ木小学校 | | 2 | 2 | 2 |
| | 養正小学校 | | | 1 | 2 |
| | 鏡山小学校 | | | 2 | 2 |
| | 西院小学校 | | | 2 | 2 |
| | 藤ノ森小学校 | | | 2 | 3 |
| | 竹田小学校 | | | 2 | 2 |
| | 小　計 | 10 | 20 | 26 | 31 |
| 中学校 | 弥栄中学校 | | 2 | 2 | 2 |
| | 京都御池中学校 | | 2 | 2 | 2 |
| | 修学院中学校 | | 2 | 2 | 2 |
| | 西院中学校 | | | 3 | 3 |
| | 藤森中学校 | | | 3 | 3 |
| | 小　計 | 0 | 6 | 12 | 12 |
| | 合　計 | 10 | 26 | 38 | 43 |

（注）平成16年度から授業科目として実施

表２　「教育課題研究実地演習」
演習校・受講学生数一覧表

| 平成16年度 | | 平成17年度 | |
|---|---|---|---|
| 演　習　校 | 人 | 演　習　校 | 人 |
| 城陽市立深谷小学校 | 8 | 宇治市立宇治小学校 | 12 |
| 京田辺市立田辺小学校 | 7 | 京田辺市立田辺小学校 | 12 |
| 合　計 | 15 | 合　計 | 24 |

3、 授業の概要

この授業の特徴は、公立学校での実地体験であること、教壇実習が主となる附属学校園での教育実習とは性格の異なる内容であること、また、約半年間という比較的長い間、子どもたちと活動をともにできることの3点です。特に2番目の活動内容では、教科等の学習指導だけでなく学級指導・生活指導や、教員の職務並びに学校での教育活動運営に関する事項も対象とし、学校と教育を多面的、実践的に学ぶことがこの授業の大きな特色となっています。

授業の開設にあたっては、次の三つの視点から考えました。第一は、個々の学生が実践的な活動を行う場を大学のカリキュラムとしてどのような形で提供するかということ。次に、実践的な活動の場でどのようなプログラムによって指導力を育成するか、内容の質的な要素を考えること。さらに、大学の正規の授業科目として単位認定することから、どのような教育的な効果がもたらされたかを客観的に評価できるようにすることです。

この授業は後期の設置とし、受講資格を次にようにしました。

＊主免実習を終えた学部3回生以上及び大学院生
＊小・中学校等の教職への志望を強くもっている者
＊規定の日数の研修・演習等に参加できる者
＊学生傷害保険に加入している者

附属学校での四週間の実習を終えることを参加要件にしたのは、より実践的な体験と学びをこの授業のねらいとしているからです。

実施形態としては「教育課題研究実地演習」は、府内の2小学校に約10名ずつの学生が、各校1名の専任の指導教諭のもとで、各自の、都合のつく曜日の半日、または一日の活動を最低10回、実地演習による研究を行うというものです。初年度は、城陽市立深谷小学校と京田辺市立田辺小学校の2校に、1校あたり7～8名の学生が参加しました。いずれの曜日でも学生が在校し、各学年には1名の学生は配属されるようにしました。そのことで、複数のクラスやクラスを超えた学年の活動が学べるようにしました。そして、各自が予め「少人数・習熟度別授業」等の研究課題を設定し、学校現場で具体的な活動を通して実践的に課題を追求するプログラムを組みました。先ほど、教壇実習が主となる附属学校園での実習とは異なる内容であるといいましたが、教科指導においてはオーソドックスな一斉指導ではなく、現在、学校教育現場で取り組まれている多様な指導法のあり方を実践的に学ぶこととしました。また、この授業では学生指導のための専任教諭が教育委員会から配置されていますので、学生は実習の途中や終わりに演習のクラス担当教員からと共に、専任教員から適切なアドバイスや評価を受けることができるようになっています。

「学校インターンシップ研修」は、京都市の教育課題や教育施策に先進的に取り組み、特色ある学校づくりを進めている小・中学校で実施しています。京都市教育委員会から推薦をうけた各校は、それぞれに学校の特徴が異なり、取り組んでいる教育課題も多様です。学生の専攻やプロフィール、履修目的を基に、研修校の教育目標や教育実践、研修生の受入れ形態等と極力合致するように研修校を決定しています。研修校

には約2名の学生が配属され、研修テーマに応じて学年配属等が決定されますが、特定のクラス、教科に固定するのではなく、できるだけ多様な活動が経験できるように考慮されます。具体的な活動としては、学級担任の補助（教科・道徳・学級活動、総合学習、学級経営、担任業務等）、教科（専科）担任の補助、学校・学年行事、委員会活動等の補助、校内の打合会、学年会、研究会、保護者会等への参加などです。学生がそれぞれの学校現場で研修する内容は多様で、個々に応じたものとなっています。研修は各自の都合のつく曜日で朝から夕方までの活動を10日間以上行ないます。

両プログラムとも正規の授業科目として単位化するにあたって、活動時間の確保、活動内容の把握、教育効果の確認を考慮しました。活動時間では、大学の実習の単位時間、2コマ15回で2単位を基礎としました。「教育課題研究実地演習」の場合、半日の実習を10回以上、事前指導や実習校での打ち合わせ、中間の振り返り、全体発表・討論会などを含め15回分以上の時間数は充分に確保されています。「学校インターンシップ研修」の場合は、1日の活動を最低10回行うことで活動時間は確保されています。

活動内容に関しては、学生が携行する研修ノートの記入を通じて、活動日程、内容、成果等を把握しています。この研修ノートでは、期間中のすべての活動内容が記録されると共に、活動に際して準備した資料や、演習校から配られた資料類、また、指導案や教材などの成果物のすべてが一冊にまとめられるようになっています。また、中間のまとめや全体交流会・報告会を行い、途中での振り返りや活動の成果、課題を全員で交流・共有する場とするとともに学生への指導助言の機会としました。

教育効果に関しては、実習形態であるので、優・良・可・不可の判定とはせず、設定した基準以上の活動時間と内容、成果があれば合として、合・否で判定することとしました。最終的には20-30ページにわたる研修ノート（活動記録）の提出による各学生の詳細な活動内容の確認を行ない合・否で評価しました。

二つの授業は共通している点も多いので「教育課題研究実地演習」のシラバスの一部を表3に示します。

表３ 「教育課題研究実地演習」のシラバス

1. 学年・期間・単位数　3年次　後期　2単位
2. 科目区分　課程共通科目
3. 授業担当者　実地教育運営委員会
　演習校での専任指導教員
4. 授業の到達目標
(1) 学校教育における今日的課題について、京都府の取り組みを演習校の研究テーマを中心に具体的に理解できる。
(2) 演習校で研究テーマとして掲げて取り組まれている今日的諸課題について、演習を通して実践的理解を深めるとともに課題解決に向けての意欲を高める。
(3) 演習を振り返り、自身の成果をまとめ、発表、交流することで、自己省察能力とコミュニケーション能力を高める。
5. 授業の概要
(1) 授業は、学校教育における今日的課題について京都府の取り組みに関する講義と、京都府内の小学校での演習並びに演習の振り返りおよび評価に関する内容とに分かれている。
(2) 演習を基本とするが、最初に概要説明及び諸注意、演習での課題やテーマについての説明が行われる。
(3) 演習は1回半日を基本とし、小学校2校に分れて実施する。演習校では学校の研究テーマのもと実習指導担当専任者の指導・監督にしたがって演習を行う。
(4) 演習の中間及び終りには全体で演習を振り返り、その成果と今後の課題を発表する場を持つ。
6. 授業計画
　1.　オリエンテーション並びに事前指導
　2.　演習校の紹介と演習テーマの決定
　　（グループ討議）
　3～7.　演習校での活動（前半5回）
　8.　中間の振り返りと今後の活動について
　9～13.　演習校での活動（後半5回）
　14.　演習の振り返りと交流会
　15.　演習校での成果発表会
　（この後、学内で公開の「全体研究発表会」を開催する）
7. 評価の方法
　演習状況を基本とし、演習日誌及び発表レポートを考慮し合否を決定する。

第2回サテライト教室開設記念シンポジウム「地域と連携した教員養成のあり方」

## ◆ 学校インターンシップ研修による学び ◆

「学校インターンシップ研修」や「放課後学習チューター」など、新しい実地教育のあり方に関するシンポジウムが平成16年11月13日、実地教育運営委員会が中心になって開催されました。

このシンポジウムでは、学校インターンシップでの学びについて、さまざまな角度から議論が展開されました。この時の参加学生と受入れ校からの報告の一部を次に紹介します。

### 教師になりたいという気持ちが高まる

丸橋萌々（音楽科教育専攻）

私はもともと小学校の教師になりたくて、京都教育大学に入りました。ピアノ専攻ですが大学では部活動、ボランティア活動などに時間を割いています。1・2回生の頃は大学での勉強や部活動に時間を取られて、他の事にはあまり力を入れられなかったのですが、2回生で観察参加研究に行き出したり、3回生で附属小学校に実習に行かせてもらってから、大学での講義で教えてもらっている勉強だけで教師になっていく上での力になっているのかという不安を感じるようになりました。理論は充分に勉強しており、実践的な話を聞いても理解はできるのですが、実際はどうなのかを生の子どもに接し、学校の現場で実際に働いている先生方の取組や方針などを見せてもらわないと、これから教師になるために自分に必要な事が解からないのではないかと思い、学校インターンシップに参加しました。

他にも、学校外での子どもの姿というものをなるべく見たいと思い、家庭教師や塾講師、体操教室の指導員などをしているのですが、やはり教師をめざすのならば、小学校や中学校の学校内での子どもの姿を見ていかないといけないと思います。でも、一人の学生の力だけではそう言う機会を作り出す事は出来ないので、今回のような学校インターンシップというものは、私のように教師を目指す学生にとってとてもありがたい事業だと思います。

いろんな小学校に行ってみますと、同じ年代で同じように家庭で育って同じ事を学んでいるのに、子どもは一人ひとりが全然違った姿を見せてくれますし、学校で見せる姿も違います。子どもが同じような事をしていても、学校によって先生方の接し方が違っていたので、色々な学校をみてみたいと思いました。

この活動、現場で子どもたちと接するという活動を通じて教師になりたいという気持ちがどんどん強くなっています。小学校の現場で特に勉強になったのは生徒指導についてです。講義の中でも「こういう場合には叱らなければならない」ということは習うのですが、先生方は状況に応じていろいろな「叱り方」をされていて、しかも、一人ひとりの児童に対してもそれは違っています。そういった事例を実際にたくさん見ることによって、自分の「叱り方」というものが見えつつあります。

もう一つ実習の心得というものをもらうのですが、その中には社会人としての心得、言葉遣いなどについて書かれていて、文章に書かれていることを現場のいろいろな状況の中で使っていくことで、頭での理解と実際の行動との溝を埋められることができて良かったと思いました。

### 教師としての理念を持つこと

中波　慎（社会科教育専攻）

私は、現在は統合により白川小学校に名前を変えていますが京都市立粟田小学校に平成16年2月2日から3月4日までの約1ヶ月間、月曜、水曜、金曜の計15日間の研修に行かせていただきました。

まず初めに、私が学校インターンシップ研修に参加した理由をお話ししたいと思います。それは、三つあるのですが、一つ目は3回生の時、主免の教育実習で中学校に行きましたが、将来、採用試験で中学校と小学校のどちらを受けようかと迷いました。副免の実習は4回生の5月、6月頃にあり、その後すぐに教員採用試験になるので、その時に決めていては試験準備に対して時間不足になると思ったからです。ちょうどそ

んな時にこの授業の話を聞き、それならこの研修で小学校を体験して、主免での中学校と比較して進路を決め、教員採用試験に臨もうと考えて、参加させていただきました。

二つ目の理由は、私の教師としての技術向上の為です。私は教師になりたいという気持ちは強くありましたが、それでは教師としての実践力が備わっているかと自分に問いかけた時、正直、まだ備わっていないのではないかという気持ちが強くありました。学生のうちから、思いだけでなくて実際に行動に移して行こうと考えて参加させていただきました。

三つ目は、教師の舞台裏の仕事を見てみたいし、自分でもやってみたいと思ったからです。実習では授業をし、子どもと遊ぶだけでしたが、先生方は休憩時間や放課後にも様々な仕事をしておられます。その全てを見てみたいという思いから参加しました。

私はおもに5年生のクラスに、授業時間から給食時間も含めて、一日中入って一緒に行動する形になりました。ただ、一日の中で1、2時間程時間を取っていただき学校内の様々な先生からお話を聞かせていただきました。例えば校長先生や教頭先生、研究主任の先生、同和主任の先生、栄養指導の先生や会計事務の先生から教師になったらこういう仕事があるのだという色々なお話を伺いました。また、他の学年のクラスにも、1時間だけですが行かせてもらいました。そして、研修の最後の方では、私も実際に授業をさせていただきました。算数と社会を合わせて10時間ほどの授業をしました。社会では、「森林の働き」という一単元を丸々任され、指導案から考えて、研究授業として授業を行ない、そのあと先生方から沢山のアドバイスやご指導をいただきました。

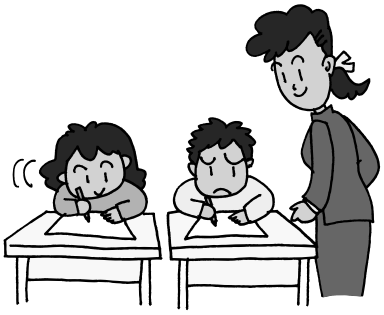
放課後にも、委員会活動、部活動、新着任同和研修という自主的な研修、生涯学習の一環である「ふれあい活動」などに参加しました。

私が得たことを三つお話しします。

一つは、教師の仕事はあまりにも忙しいと感じたことです。ある先生が言われていたのですが、忙しすぎて何から手を着けていいのかわからなくなるとか、仕事に携わる時間が長いので時給で換算してみると800円ぐらいになるなどということが実感できました。教師というのは授業をする以外に、実際は本当にたくさんの仕事があることがわかりました。

二つめは、様々な家庭環境の子どもがいるということを学びました。実際、両親が揃っているのがあたり前のことではないということなどは、附属学校の実習だけではわからなかったように感じました。私の児童に対する見方も広がりました。

三つ目は、これから学生のうちに考えていかなければならないと思う課題が見つかったことです。それは、私の教師としての理念がまだ備わっていないという課題でした。私は粟田小学校で子どもたちを本気で叱ったり、自分の思いを伝えるということが出来ませんでした。それは、私自身が子どもたちをどう育てたいとか、どう成長させたいかとか、子どもたちにどうなって欲しいかという理念がはっきりしてないから言えなかったのではないかと今思います。残りの学生生活の間に、こういった理念を確立させてから教師になろうという課題がはっきりしたことがインターンシップ研修で学んだ大きな成果だったと思います。



受入れ校から見たインターンシップ研修

京都市立山王小学校長　松谷龍雄

私共の学校は京都駅に一番近い小学校で、八条口の南側に粟口というビルがあり、そこを下がったところです。竹田街道から20メートル程東へ入っているので竹田街道からは見えません。大変小さい学校で、児童数は120名程でもちろん単級です。一番少ないクラスで14人、多いクラスで25人という学校です。

先ほど放課後チューター受入れ校の八幡小学校の松本校長が言われていたように、本校でも来る者は拒まずです。個に応じた教育をしていこうとすれば、人手は一人でも多く必要なのです。その中で3年前からインターンシップ研修のお話をいただき、毎年2人ずつ来ていただいております。

インターンシップ研修というのが、京都教育大学の学生さんにとって有効なものだと私も思っています。初めは大変心配いたしました。でも、来ていただいて本当に良かったと思っています。来年もと言いましたが、同じ学校に何年もは無理だそうです。でも何時でも歓迎いたします。また、優秀な学生さんを来させて下さったのですが、そうでない方も歓迎いたします。何故なら学生さんの研修のお世話をすることが我が校の教員のリトレイニングになるからです。

インターンシップ研修の学生さんに、してほしいことなどをきちんと伝えられない先生が子どもたちに伝

えられるはずがない。こういう視点から行きますと、インターンシップの学生さんを上手く動かせない先生は子どもたちも動かせないのではないかということです。現場の学校の一つのメリットとしては、こういった教師のリトレイニングというのがあるように私は思いました。

来ていただく時期は、わざわざ本校の一番忙しい時期で、研究発表会の1ヶ月前くらいにしています。教師は準備などあり、忙しくしており、そばへ寄るだけでも怒り出すくらいの時期です。そういう時にこそ、その学校や教師の本当の姿が見られると思うからです。今年も12月3日に研究発表会を開催しますので、インターンシップ研修の方には11月の頭から来ていただいております。2週間ほど前になりますと、教員は夜遅くまで残っているので、学生さんには帰宅するように言うのですが、一緒に遅くまで残っているのです。その訳を聞きますと、先生がどんな風にポスターセッションのためのポスターを作っているのかを知りたいといって手伝っているのです。そういう風景などを見ますと、来ていただいて本当に良かったなと思いました。

最後に少しエピソードを紹介させていただきます。今まで4人の方に来ていただいたのですが、一昨年の方は、一人は滋賀県で教員に採用され、もう一人は京都市の学校で常勤講師をされています。去年の2人は京都市で教員に採用されて、おのおの当初の教師になりたいという目的を達成していただいているようです。

本校は、教育的にはそう恵まれた環境の地域ではありません。大変厳しい条件を抱えている子どもたちもいます。毎朝迎えに行かないと学校に来れないというような子もいます。そんな中で一人の男子のインターンシップの学生の方が、自分の母親は兵庫県の困難校の教師で、家に持って帰って仕事をしている姿をずっと見て育ったが、その母親を見直しましたといいました。その大変さというのを私たちの学校に来て初めて

わかったということでした。それがわかっただけでもインターンシップの意義があったのではないですかと私は申し上げました。

また、一人の学生さんについて、他の先生方が「この学生さんは要領がいい」つまり、言ったことを理解するのが早く、ぱっぱと仕事が出来るのですが、子どもへの近さというのでは、もう一人の学生さんのほうが近いというのです。それはどういうことかといいますと、子どもへの話し方の違いだというのです。

先程、どこまで叱っていいのか、どこまで指導していいのかということが話題になりましたが、これについては、その方が考える範囲でとことんしていただいていいのです。よっぽど変なことでなければ遠慮しないで下さい。また、この学校の良い所だけでなく、悪い面も言ってくださいと言うのですが、学生さんは言い難いようですね。

学生の変化ということですが、インターンシップ研修のなかでの学生さんの変化は、職員室や学校内での動きの変化です。ねずみの実験のようにではありませんが、どう動けば合理的か考えて動くようになります。うちの学校はブロック制をとっているので、1、2時間目の間の休み時間が無く、無駄な動きをしている暇がないのです。どこに何があるか、何のためにそこに行くか考えて動くようになります。

もう一つ変わってくるのは顔つきです。学校に慣れてきて緊張がとれてくるというのもありますが、自信に溢れた顔つきになってきます。

うちは、教育実習は受け入れていません。なぜかと言うと、毎日だと担任の負担が大きいからです。このインターンシップ研修の良い所は事前に来る日や時間を打ち合わせ出来るところです。そうすると、受け入れる担任にもゆとりが出来るのです。毎日、朝から晩までだときっと担任も疲れます。

また、このインターンシップ研修では、ある時間帯は教室でなく、職員室にいて、プリント刷り等をしてもらっています。それは、用務員さん、事務職員、給食調理員さん、教頭、教務主任などがどの様な動きをしているか見てもらいたいからです。教師に採用されて、担任を持つとなかなか見れないところなのです。例えば、苦情のような電話がかかってきた時に、教頭なり、教務主任がどの様な対応をしているかなども、見ておいて欲しいと思うのです。

本当にこの制度は受け入れ側の姿勢如何に関わってくると思いますので、インターンシップ研修で来られる方々とお互いがメリットを感じていけるような形で受け入れて行きたいと思っています。

# ◆ 平成１６年度　「教育課題研究実地演習」研究成果発表会 ◆

初年度の研究成果発表会が下記の要項で開催されました。2校で演習を行った15名が、3つのテーマに分れて、代表者がそれぞれ成果を発表しました。その発表の一部を紹介します。

1．期　日　平成17年年2月15日（火）
2．会　場　本学　C6講義室
3．内　容
＊テーマ1「少人数・習熟度別指導について」
発表1「習熟度別指導の実際」　石川　茜
発表2「そのメリット・デメリット」　小谷展弘
（グループメンバー：
坂下麻里子、北島真喜、神崎有香）
＊テーマ2「学級運営・学習集団づくりについて」
発表1「教室掲示物について」　山本裕美
発表2「子どもとの関わり」　青山　哲
発表3「クラスづくり」　寺井雄一
（グループメンバー：小柴文乃、小酒未央）
＊テーマ3「多様な子どもへの関わりについて」
発表1「課題のある子への対応」　鹿野真澄
寺尾至甲・甲斐聖人
発表2「不登校児への対応」　藤井宣至
発表3「アスペルガー症候群の児童への対応」
飯田幸子
講評　城陽市立深谷小学校長　森垣壽一
京田辺市立田辺小学校長　奥西尚子
京都府教育委員会教職員課長　中島守正

＜テーマ1から＞
発表「少人数・習熟度のメリット・デメリット」
小谷展弘（数学科教育専攻・田辺小学校）

最初に感じたメリットというのは「習熟度・少人数授業」を僕たちは経験していないので、「あ、これは一斉授業に比べると、すごく集中している」というのが、まずわかりました。

子どもたちにとって活躍する場が増える。特に習熟度などでは「発表しやすい」ということで、子どもたちが生き生きできるということから集中もできているんじゃないかと。教師側にとっても丁寧な指導が行なえるということで、個に応じた指導ができるということもわかりました。

子どもにとっても「わかる授業」になります。ですけどこの「わかる授業」というのもちょっと行き過ぎると「わかりすぎる授業」というのと「わからなすぎる授業」というのがデメリットになってしまう。「わかりすぎる授業」というのは子どもたちが考えなくなってしまうし、「わからなすぎる授業」のも考える意欲がなくなってしまうので、クラス分けでもその子が、例えば習熟度でどこに行くのが一番いいのかということが問題になってきます。

少人数などのデメリットとして一方通行な授業が多くなってしまう。少人数と個別指導というのは違うと思ったんです。「少人数」というのは、人数は少ないのだけど、その中でお互いの考えが交換できたり、意見を言い合えたり、お互いが教えあえるという機会を有効に生かせば、一斉授業のいい点でもある「いろんな人の意見を活用できる」というところも取り込めるのではないかと思います。

一番メリットとしていいなと思ったのが「学年経営が必要となる」ということを感じました。「ああ、この先生たちは学年経営してるな」とか「学校全体でまとまってるな」と感じた場面があって、校長先生とか教頭先生とお話しする時には、「うちの学校は」とか「6年生は」という言葉をよく聞きました。小学校に行った時「うちの○年○組は」「うちのクラスは」という先生がけっこういらっしゃるんですけど、深谷小学校に行った時に「6年生は」とか「5年生はこういう学年だよ」いうところから、学級同士のつながり、学校の中で全体として何かしようとしてるか、学年でこういう風にやろうというのがあるのだなということがわかりました。

クラス間の先生の交流というのを授業の打ち合わせとかでするというところではメリットですけど、逆にいうと、先生からすると今まで一斉授業ではあまりしていなかった打ち合わせを「しないといけない」と考

えると、デメリットになってしまう。実際に僕たちも行って感じたことが、小学校の先生というのはとても時間がないというか、予定外の仕事が入ってくるということ。「○○ちゃんがケガした」とか「××ちゃんが△△君に悪口を言ってケンカした」なんていうのがあるんですけど、でも、そういうトラブルが起きた時に「教師というのはその日のうちに解決しておかないといけない」というのを教わりました。その日のうちにそのことを解決しようと思ったら、打ち合わせの時間がどうしても短くなってしまうのですけど、でも、やっぱり打ち合わせは短くても必要だということを感じました。

僕が習熟度のデメリットとして一番見えたところは「教え合いの機会がやっぱりちょっと少ないんじゃないかな」と感じたところです。教え合うことの子どもたちにとっての学習効果は僕自身高いと感じていています。僕は数学科教育専攻ですが、小・中学校までは算数・数学はもう大嫌いで見るのもいやだったのですが、高校に入った時に友だちに、これはどうやるの？と訊かれた時にこうやるんだよって教えることによって、「あ、自分はわかったんや」と思えました。それ以降、友達に積極的に教えるようになり、テスト勉強の2週間前に勉強して、「訊いて、訊いて」といって教える中で理解ができたというのがあります。教え合うような機会を少人数・習熟度でも取り入れればいいのではと思いました。

＜テーマ2から＞

発表「教室掲示物について」

山本裕美（美術科教育専攻・深谷小学校）

私は美術科教育でとても絵を書くのが好きで、そういうことを学校の教師になってからも掲示物の方で生かせたらと思って、この掲示物（教育環境）ということに絞って後半は活動しました。

掲示物は「常時掲示」「定期掲示」「一時的掲示」という3つに分かれることを教わりました。その中で、具体物を示していきます。

これは、職員室横の階段ですけれども、１、10、100、1000、10,000、100,000、1,000,000、･･･とずっとつづいている面白い掲示がありました。これは階段の一段一段に、踏むところのちょうど踏む瞬間に見えるんですけども、常に掲示されていてこれがリズム的にも「1、10、100、1000、10000･･･」という感じで生徒も楽しく単位の事も覚えられるような工夫がされているのですごく面白いなと思いました。

いろいろ掲示物を見せてもらう中で、私がもし担任ならどのような掲示をしたいかなということを考察してみました。

教室というのは場所も限られているので、その生徒の成長段階や時期に合った掲示物を貼らないといけないということを教わりました。

あるクラスに行った時、初めてその教室に入った瞬間、すごく落ち着きのない雰囲気を感じて、なぜかなあと思ったのですが、その理由の一つに掲示物が雑然と貼られていることに気づきました。その後に、私がすごく尊敬している先生がいらっしゃるんですけど、そのクラス行った時、クラスの掲示物がきちんと貼られていて、こちらには係などの給食当番などの掲示物が、こちらの横の壁には算数などの単位とか公式とかの書かれた掲示物が貼ってありました。特に算数などは常に見て、定着させないといけない内容が多いので、算数のそういう掲示物をきちんと綺麗に貼るっていうのはすごく効果的なんじゃないかなと思いました。先生にお話を聞いても、生徒が暇な時にじっと見たりしているというので、それもすごくいいなと思いました。

その次に、「題材名」「めあて」なども貼ることがいいと教わりました。

例えばこのように図工で絵を描く、これは一年生で絵の具を使ってみようという授業ですけれども、この風船の中にいろいろな色を塗るといって、その中で例えばこの辺に「きれいに色を塗ろう」とか「いろんな色を塗ってみよう」とか、そういう「めあて」を書いたりとか、例えば作品が他の場所に代表で行っている場合は「この子の作品はどこどこに掲示してあります」とか注意書きを書くと授業参観に来られた保護者の方も「ああ、そうなんだ」と安心されると聞いたので、そういうことにも注意したいと思いました。

他に、書写の毛筆の掲示の場合だと、普通は清書したものが貼られているんですけれども、その担当の先生は、実際された話ですけれども、朱墨で修正したものを掲示するという方法をとっていらっしゃるという

ことです。練習では修正して、「ここはこうはねた方がいい」とかいうことを書くんですけれども、掲示するものだけは花丸、二重丸とかだけをつけて、それを貼ってあげると書道が苦手な子も褒められたということがすごくわかりやすいので、意欲に繋がるのではないかなと思いました。

最後に「今週の美術館」というのを私はやってみたいと思っています。私は美術科教育専攻ですが、小学校の時、絵は好きだったんですが、図工の授業はそんなに好きじゃなくって、小学校3年生の時ですけど、自画像を描いた時、担任の先生に「下手くそだなあ」ということを言われて、すごいショックだった経験があるんです。小学校6年生の時、友だちに絵を見せたら、「すごくうまいやん！」というふうに言われて、そういう褒められるってことがすごく嬉しかったのです。これは普段の生活の中でこういう風に黒板の隣に貼ってあげて「ここがよかったよ」とかコメントをつけて、「褒める」という経験を普段の生活からしていけば、個性を伸ばすっていうことにも繋げられるのではないかなと思って作ってみました。

＜テーマ3から＞

発表「課題のある子への対応」

甲斐聖人（数学科教育専攻・田辺小学校）

僕が「生徒指導」という課題をもった経緯ですが、教育実習が9月にあって今回の演習が10月からあったんですが、実習中に「怒ることと叱ること」の違いをしっかり見極めをしていくようになりました。その中で担任の先生と違うところというのが「怒ることと叱ること」でぼくは怒って子どもたちを行動させるような感じのことしかできていなく、それで今回の演習で「生徒指導」という課題をもって、どういうふうに指導していけばいいのかということをしっかり見つけていこうと思って参加させていただきました。

その中で、この課題でわかったことが「子どもを認めること」と「子どもを納得させる指導」の2つです。

まず「子どもを認めること」というのは、やはり子どもの話をしっかり聞いてあげること。また、子どもの努力や頑張った事をしっかり褒めてあげることで、子どもはしっかり先生にやった内容を見てもらっているんだなというふうに思えるようになると思います。そうすると、子どもたちは、また「先生に褒めてもらおう」「何とかして見てもらおう」と思って、今以上の努力をして学習意欲がわいたり、さらによい所を見せようとしたりすると思いました。

これはやっぱり低学年でも高学年でも同じで、誰でも褒められたら嫌な思いはしないと思いますし、特に学年でちょっとついていけてない子とかにしっかりついて指導してあげると、子どもたちはさらに頑張っていいところを見せようとするということがわかりました。また、低学年の指導にあたる場合は特に、先生から子どもたちに対する要求をしっかり述べてあげないと、子どもたちはやっぱ自分で好き勝手やってしまうので、そういう時にしっかり何かやりだす前に、子どもたちに先生が最初に見本を見せて、それで子どもたちの指導にあたるということが重要だと思いました。

もう一つ、「子どもを納得させる」ということは、これが先ほど述べた「怒ることと叱ることの違い」で大きくわかったことです。ただ「怒る」というと子どもは怒られたままになって、その先生が一番言いたかった事をわからないまま、怒られたことに対しての憤りみたいなのを感じてしまうことが子ども達の中でもあると思いました。

「叱る」ということは子ども達自身の成長を見守っているっていう意味ではすごくよいことだと思います。子どもを叱って「何がいけなかったのか」ということをしっかりと子どもと先生とで一緒になって考えて指導している中で、子どもの成長をしっかり一緒に見てあげるということを伝えていくことが叱っている中でも大事なことではないかと思いました。

今回、2年生を見させていただいたのですが、2年生のうちからそういう基本的な生活習慣を身につけさせていけば、中学年、高学年と成長していく上で、子ども自身が自分たちで「良いこと、悪いこと」の判断がついてくると思うし、先生たち自身が子どもたちをもっと見守って、信頼関係を築いていけるのではないかと思いました。

これらの生徒指導を行なう上で、やはり子どもとの信頼関係を築いていないとなかなか先生自身の考えも伝わらないし、子どもたちもしっかり僕たちの考えをわかろうとしないと思います。子どもの指導にあたっては、先生がまず「子どもを第一に考えて指導してい

るんだよ」ということをしっかりわかってもらうことが大事だと思いました。

＜講評より＞

子どもの出す問題をどうとらえるか

城陽市立深谷小学校長　森垣壽一

校長室で時々、皆さんとお話することがあって、こういう「課題をもつ子ども」は確かに課題を持っているわけですけれども、ついつい教師はその課題を「家庭のせい」とか「教師（自分）ではないもののせい」にしながらいろんな話をするわけです。

いろんな課題を持っていても、自分が学校でその子どもを担任すれば、その課題っていうものはやりかたによっては軽減され、あるいは見えなくなる、なくなるわけじゃないですが、見えなくなる。そういう仕事が教師の仕事だというふうに思っています。もちろん、先ほどから何回か出ているアスペルガーと診断されている子どもなんかは脳の一部の働きに損傷が生じたのかもわかりませんし、一言ではいえないですけれども、一般的に言う課題のある子どもというのは教師がどう関わっていくかによって、課題が軽減したり見えなくなっていくということになる。そういう意味で、何人もの先生が教師の指導力量ということを話しだしたら、何時間でも話になってしまうとおっしゃいましたが、本当にその通りで、子どもの出している問題は実は自分が出している問題ではないかというふうに教師として考えていってもらえれば、きっとその先生に担任してもらった子どもはずいぶん助かるだろう、救ってもらえるだろうと思います。「この子どもの出している問題は、自分が出させてしまっている」という風に教師の方が思えていけば、子どもは変わっていく、教師と一緒に変わって行く、という風なことを思います。

子どもや親と教師の信頼関係

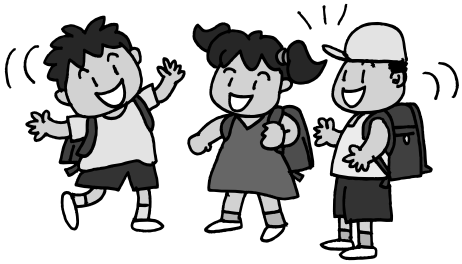
平成１６年度　京田辺市立田辺小学校長　奥西尚子

皆さんの発表をお聞きして、実地演習は短い期間ではありましたが、教師として大切な事をそれぞれの方がつかまれたことに感心しました。

子どもたち一人ひとりには何らかの課題があります。私は担任をした経験から全く課題のない子はいないと思います。子どもを指導するときに教師として大切にしなければいけないことについて何人かの方が同じようなことを、言葉を変えて報告されていました。それは、「自分のことをわかってくれている、自分のことを見つめてくれている先生がいる、大人がいる。」と子どもたちが思う指導をすることです。このことは教育の中でとても大事なことです。

甲斐さんは、子どもを指導するとき「納得させる」「子どもを認める」ことが大切であることに気づいたことを発表されました。「怒る」というのは、腹を立てることで、子どもたちのためにしているのではありません。それに対して「叱る」というのは、子どものために愛情こめて「こういうふうになってほしい」という教師の熱い思いをこめて話すから、それが子どもの心に響いて納得でき、先生の言うことに「うん」とうなずきわかってくれます。たとえその場ではすぐに素直になれなくても、時間が経って、「ああ、あの時先生が言ってくれたことはこういうことだったんだ。」とわかることもあります。

最後に、「スクールカウンセラーさんがとってもよいことを言ってくださったんだなあ」と思いました。冬場になると登校できなくなる6年生の子の指導例をお話された藤井さんの発表からそう思いました。その子は親の生活リズムがどうしても子どもと合わないために登校できなくなってしまいましたが、その保護者と話をする時、「親が悪い」ではなくて、親の気持ちを理解し、「お母さん、大変ですね」という一言で、先生と親との信頼関係をつくっていくということができることをスクールカウンセラーから学ばれたことを知り、とても嬉しく思いました。



## ◆「学校インターンシップ研修ノート」「演習全体交流会」の記録から◆

平成16年度　教育課題研究実地演習生
青山　哲

演習の後半では、小学校教師の仕事はさまざまなものがあると思うが、それらをどのような時間を使って、こなしているのかを研究したかった。

細かな仕事は、時間との戦いだと思う。その状況下で教師は授業をしなければならない。当然、教育実習のように1時間の授業の予習に多くの時間を費やすことは不可能であろう。かといって、授業を適当にするわけにはいかない。だから、授業をする上で大切だと思うことを自分なりに授業を見て研究した。次に示す3つのことは、欠かせないものだと思う。本時の目標の把握・危機管理・教科の種類によって指導上大切なことの理解である。この時間で何を1番教えなければならないかを把握しておく。危機管理は、授業で彫刻刀やアルコールランプ等を使用する場合には、当然児童が怪我をすることがないように注意を払わなければならない。教科の種類によって指導上大切なことの理解というのは、例えば理科の実験なら、結果を子どもの中から導き出すことが大切であり、そういったことをしっかり理解して、授業をしなければならない。

最後にこの実習を通して、教師という職業はこういうものだというのがうっすらではあるがつかめてきた。楽しいこともあるだろうし、悩み苦しむようなこともあるだろうが、教師という職業は、本当に魅力のある職業だとしっかり思えた。校長先生が始めに言っておられた「日本の未来を創る職業です」という言葉の本当の意味が、少しではあるが分かってきた。この実習をとても満足して終わることができて、本当に良かった。絶対に教師になろうと思う。

平成14年度　学校インターンシップ研修生
（現　富士宮市立北山小学校教諭）
奈良部芙由子

今回の研修を通じて得たことの中で、まず挙げるとすれば「違い」について知ったということです。

研修中に本当に多様な子ども、クラス、授業を見ることが出来ました。子どもたちの様々な違いを感じる中で、その子の背景や要求を感じ取る力が大切だと知りました。

また、気になる子に細めにさりげなく声をかけることの大切さも知りました。声を掛けるだけでふっと子どもの顔が柔らかくなる場面を何度か見るうちに言葉の力を感じました。私自身は、後になって「ああいう言葉を掛けてあげればよかった」と反省することも何度かあって、さりげなくやっている先生方の姿を見てかなり勉強になりました。同じ声を掛けるのにも子どもの性格によって掛け方を変える必要も感じました。特にひいてしまっている子については、顔すら見てもらえず、困りましたが、先生に相談したりする中で自分なりの感覚はつかめたように思います。その一つとして笑いを引き出すことの大切さを感じたのですが、これはひいてしまっている子どもでなくとも、子どもと接する時に大切な要素だと感じました。そのためには自分なりの引き出しをいくつか持っておいて、「これを言えば笑顔が引き出せる」というものを出せるようにしておきたいと思います。

この引き出しの大切さは、いろいろな先生のクラスの授業を見ている中で、特に何度も感じました。教室に入っただけで、それぞれのクラスのカラーを掲示などから感じました。それぞれの先生の良いところを真似することから始めて、自分なりのカラーを見つけていきたいと思いました。

また、先生方を見ていてもう一つ感じたことは、チームワークの大切さでした。毎日朝早くから夜遅くまでどの先生も残っていて、職員室では相談したり話しあったりしている姿がよく見られました。「助け合い」は、何より学校がうまく進んでいくために必要な要素だと感じました。

研修を振り返ってこうありたいと思う教師像は、子どもや保護者、他の先生に好かれるというより「信頼される教師」です。具体的に言うと、子どもを何よりも大切に思っていることは大前提で、加えて、この分野ならこの人に任せられると思ってもらえるものを2つくらい持っている、熱い心と冷静な柔らかい頭を持った教師です。子どもたちに信頼してもらうには授業が大切なポイントであることも改めて感じました。

そのためにも、今のうちに自分自身をしっかり見つめ、自分の特性をよいところ、悪いところを含めて理解しておく必要を感じました。また、自分の得意な分野を見つけてじっくり勉強しておくことも必要だと思います。加えて、子どもを見ていて何を大切にして、何を許してはいけないことにするのかという自分なりのしっかりした基準を作り、持っていなければならないと思います。

## ◆ 新しい実地教育の成果と今後の展望 ◆

授業の成果

この授業は附属学校での4週間の主免実習を終えた三回生以上を対象にしています。そこで、教育実習と対比させて考えてみると、次の6点がその特色、成果として挙げられます。

1．多様な内容を実践的に学べたこと

教育実習では教壇実習（授業）が中心になりますが、この授業では授業だけでなく、学級運営、生徒指導から学校行事、担任事務や保護者会、職員会議の参加まで、様々な活動に参加しています。受講生の多くはこの授業の履修目的にこのことをあげ、振り返りにおいても、授業以外の多様な活動をとりあげています。

2．学校教育を総合的、全体的に学べたこと

研修内容が多種多様なだけでなく、学校の教育活動を、例えば授業を学級運営と関連づけて考えたり、一つのクラスだけでなく学年や全校の視点から見たり、あるいは、担任や教諭以外の校務分掌や職種との連携や協働という視点から見たりと、総合的・全体的に見て学んでいます。学生の配属や活動を特定のクラス等に固定しないことの成果だと言えます。

3．先進的、今日的な教育実践を学べたこと

今、学校現場では習熟度別指導や絶対評価など、新しい指導法や実践が次々と取り入れられています。それらの多くは学生自身が小・中学校時代には経験しなかったものです。教育実習では学級単位の一斉指導が教壇実習の基本となっているため、これらの新しい実践の実際を現場で学びたいという意欲が、この授業の履修者に多くみられます。研修や演習の受入れ校には、これらのテーマに応えられる学校が選ばれていることで、成果が上がっていると思われます。

4．一定の期間のなかで学べたこと

教育実習は短期集中型の実習が基本ですが、この授業は基本的には週1～2日で2か月あまりの期間にわたって行います。毎日ではない活動ですので、学校現場で感じた疑問や課題を、時間をかけて考えることができるという良さがあります。また、長期間子どもたちと関わることができ、子どもの変化や成長を感じることが出来ます。特に学級指導においてはこの点の意義は大きいといえます。

5．教職を生き方として学べたこと

この授業の大きな成果は、受講生が教員の仕事の内容を学ぶだけでなく、仕事を担う教員そのものに着目し、教員の生き方や教職を支える情熱を学んでいる点です。多くの受講生が素敵な先生、尊敬する先生、憧れる先生に研修校で出会っています。実習の中で、教職の素晴らしい部分として、困難な状況で、悩み苦しむながらもそれを乗り越えていこうとする教師の情熱を、その源泉に触れながら学んでいます。

6．自発的、主体的に学べたこと

大学での講義や時間の限られた主免実習と違い、この授業では、自ら主体的に多様に学ぶ機会があります。課題意識を持つことで、どのようにでも実習を深めることができるという良さがあります。しかし、受け身になれば十分な学びとはなりません。この授業は始まって間がないということもあり、受入れ校の教員、受講生双方に遠慮や戸惑いがあるのも事実です。受講生自身の目的意識を明確にするため研究テーマや課題づくりを重視し、学びの深まりを期待しました。

今後の展望

実地教育がその教育効果を挙げるためには、4か年の実地教育プログラムの体系化を図り、ねらいを明確にし、他の授業科目と関連させ、カリキュラムを一体として運営することが大切です。

この授業が成果をあげることの出来た要因の一つには、主免実習での学びを生かす三回生後期に実施したところにあると思われます。しかし、受講者には教員採用の決まった四回生もいました。この区別をどのように図っていくのかが今後の課題です。また、演習校での学びを大学での学びとどのように結びつけるのか、その具体的な手だてを明らかにすることも大きな課題です。

現在の学校教育現場では教員の高齢化が進み、若い学生が学校に入ること自体に大きな教育的意義があります。しかし、新採教員の大量採用時代を迎え、その意義も変化していくことでしょう。受講生にとっては、教育現場で年齢の近いモデルとなる先輩に出会えるということは、教職へのモチベーションを高め、そのための自己研鑽をする上ではよい環境になると言えそうです。

本年度から京都府教育委員会と京都市教育委員会から特任教員を迎え、両委員会との連携がいっそう強化されました。京都の教育の充実、発展に貢献するという点からも、養成段階での実地教育プログラムの充実に今後も取組んでいきたいと思います。

# 上海師範大学国際芸術祭に参加して

国際交流委員会副委員長　田　中　多佳子

本年5月、日本と同じような初夏と梅雨のはしりの蒸し暑さの中、上海師範大学国際芸術祭に音楽科教員4名と一緒に参加してきました。学長と副学長（国際交流委員会委員長）が共に本学の新体制発足直後の多忙の上、教授会と日程が重なったため参加できなくなり、私のような新米副委員長が訪問団団長としての重責を担うことになってしまいました。準備段階からかなり緊張していたのですが、長年、本学の国際交流事業に尽力され、退職後は上海師範大学の客員教授ともなられた村田隆紀前学長も、私人として今回の芸術祭に同行して下さいました。

本学が中国の上海師範大学と学術交流協定および学生交流協定を結んだのは1993年1月27日のことで、以来12年間に、同学から計29名が本学で一年以上、本学からも短期推進制度による13名の学生が11ヶ月にわたり同学で学びました。同学における夏の語学研修は今年で9回を数え、本学からのべ13名の教職員と100名を越える学生が参加しました。2000年度以降は、教員の派遣交換も始め、交流はさまざまなレベルで盛んになりつつあります。

そのような交流をさらに深化させ絆を互いに確認し合えるような何らかの行事をと、交流協定締結10周年を機に計画された企画がふくらみ、本学だけではなく同学と交流のある各国の大学や機関が一斉に上海師範大学で芸術交流するというこの一大イベントが実現したのです。プレイベントとして5月9日から日中児童画展が始まり、12日の正式開幕から26日の閉幕までの間に、上海師範大学側の諸機関と、日本、アメリカ、イタリア、フランス、ウクライナなど各国の人々や諸機関の共同による、舞踊や演劇、室内楽などの多彩な10公演が、上海師範大学のキャンパスで繰り広げられました。同学に着いてすぐ、交流処の陸紅玉先生から、とても美しい中国語・英語の二カ国語のパンフレットと、シンボルマークのバッジが手渡された時には、思わず「わぁっ」と声をあげてしまいました。図は冒頭にシンボルマークの入ったそのパンフレットの一部です。

京都教育大学関係者の出演は5月16日と17日に開催された二公演でした。5月16日は19時15分から声楽のジョイント・コンサートでした。会場の教苑楼講堂は約270席の、マイクなしで聞こえる程良い大きさのホールでしたが、始まる前からつめかけた観客ですぐ満席になってしまいました。上海師範大学陸建非副学長の挨拶の後、まず、第一部で、上海師範大学の周進華副教授（テノール）と姚遠講師（ソプラノ）がイタリアオペラのアリアや珍しい中国歌曲を披露すると、「ブラヴォー」という声がかかるなどして場の雰囲気が一気に華やぎました。第二部では、まず本学の饗場知昭教授（テノール）が一人颯爽と登場してイタリア歌曲を歌い終えると、舞台脇からオペラの役名で呼びながら饗場（長谷川）泉講師(ソプラノ）が登場してオペラの二重唱となりました。このしゃれた演出に観客は一瞬度肝を抜かれ、その後、喝采が起きました。続いて次々と披露されたお二人のイタリアオペラの真髄ともいえる熱演は、会場の人々を圧倒するようでした。日本からこの公演のためにかけつけた伴奏ピアニスト辻本圭氏とのコンビネーションも最高でした。観客には音楽を専門としない学生も多くいたようで、興味津々の面持ちで聞いていました。ある音楽関係者ではない教員の方が、終演後わざわざ饗場ご夫妻の楽屋を訪れ、「久々に素晴らしいものを聞かせて

いただいた」と感謝の気持ちを伝えに来られたそうです。

続く5月17日は、ベートーベンの作品に焦点をあてた管弦楽とピアノ協奏曲の夕べでした。会場は700席近くもある大講堂には、前日以上に多くの人々がつめかけました。上海師範大学の学長をはじめとする教職員や学生はもとより、外国からの参加者や、本学の卒業生で上海師範大学の教員となられた郭長江氏や林静容氏、一昨年本学を訪れて講演をされた王求真講師、本学から留学中の永井和行君らの姿も見えました。

垣内幸夫教授の指揮のもと、上海師範大学万方青年交響楽団の演奏会は《コリオラン序曲》で幕が開けられました。この楽団は、1998年に音楽学院の若い教員と学生たち50名によって結成されたレベルの高い楽団で、これまでも多くの公演や録音をこなしてきたそうです。垣内先生は私たちより先に現地入りして彼らとリハーサルを重ねて来られたので、本番にはずい分仲良くなっておられ息もぴったりでした。続いて赤いドレスで優雅に川口容子教授が登場して、《ピアノ協奏曲第3番》を演奏されました。二階席で聞いていた私は、上海師範大学の教員・学生と京都教育大学の教員2名が、今まさに一体となって真剣に一つの音楽を作り上げているという光景に接して、心から感動し鳥肌が立ちました。その後の《交響曲第7番》もまた大熱演で、ただでさえ汗っかきの垣内先生はタキシードから汗がしたたり落ちそうでした。

帰国後、垣内先生のもとへコンサートマスターから中国語の丁寧な手紙が届きました。そこには垣内先生の音楽の解釈法や指揮の技術に対する賛嘆と、川口容子先生の演奏技術や垣内教授との相互尊重の上に立った共同作業に対する敬意、そしてその場に自分たちが参加できた喜びと感謝などがつづられていました。

私は音楽「科」に所属してはいますが、音楽「家」ではなく音楽の一研究者にすぎません。普段同僚として接している先生方の、いかにも音楽家らしい立派な姿や素晴らしい演奏に今回初めて身近に触れ、心から敬服すると同時にこのような先生方のおられる本学を改めて誇らしく思いました。中国人にとっても日本人にとってもヨーロッパのクラシック音楽は異国の音楽ではありますが、同時に今日、両国で最も演奏人口の多い音楽に違いありません。私は日頃、民族音楽学の立場では「音楽は世界の共通語ではない」ことを出発点として講義をしているのですが、逆に、異民族でも同じ音楽を真摯に共に演奏したり聞いたりしようとする人々同士ならではの言葉を超えて通じあえるものがあり、音楽はやはり民族を超えた交流のための良い手段に成りえうるということを認識しました。それは必ずしも世界的な音楽家同士や専門家同士である必要はなく、交流を求める一般の人々のレベルにも充分あてはまることだと思います。また、今回はたまたま音楽を介した交流活動となりましたが、ほかにもさまざまな形の交流が可能だと思います。

国際化がますます進む今日、各国と日本の教育大学同士の交流の重要性は増すばかりです。本学は、上海師範大学のほかにもオーストラリア、タイ、カナダ、韓国などに協定大学を持ちますが、数として決して多くはなく、本学の規模からもそれをあまり増やすことはできません。せめて質的に中身の濃い交流を行い、学生たちに少しでも良い国際的学習環境を提供してあげたいと思います。上海師範大学は、本学の協定校の中でも本学が最初に協定を結び、しかも学生・教員・研究の各レベルにおいて最も活発に実質的交流を行ってきた大切な大学であり、今回のことでさらに親密さを増すことができたと思います。今度は本学主催で同様のことが行えたら理想的なのかも知れません。が、今後も皆で知恵を出し合いながら様々な方法で国際交流の質的充実をはかり、両学の親密な関係を互いの国家の関係へ、ひいては他の協定校とその国々にも広げ、本学から国際感覚にすぐれた教員が巣立っていけるような学習環境を整えるべく努力していきたいと思いました。

# 「自分のことは自分でしない」
## ー子ども臨床社会学のすすめー

保健体育講座教授　杉　本　厚　夫

＜あなたは記念写真派、それともスナップ写真派？＞

記念写真を撮るときのことを思い浮かべてみてください。カメラを固定しておいて、ファインダー(あるいは液晶画面)の枠の中に、被写体が入るように人物の方を動かしますね。「右の人、そこでは写りませんので、もう少し左によってください」と。これは、これまでの日本の教育とよく似ています。学校という枠を用意して、その中に子どもを入れようとします。しかし最近、不登校の子のように、学校の枠からはみ出てしまう子が増えてきました。でも相変わらず、学校カウンセラーの助けを借りて、何とかその子を学校の枠に戻そうとしますが、その試みは必ずしも成功しているとはいえません。記念写真型の教育はどうも限界に来ているようです。

一方、スナップ写真はどうでしょうか。被写体である人物を動かすのではなく、カメラを動かします。つまり、写真を撮る人が被写体が写る位置まで動くのです。あくまで撮られる人が主体です。教育の世界で言えば、子どもが主体で、先生の子どもの見方(アングル)を変えたり、それぞれの子どもに合わせた学校を用意したりするのです。たとえば、チャータースクール(特認校)やコミュニティースクールなど、もうすでに始まっていることもあります。このようなスナップ写真の発想が「臨床社会学」の考え方です。

とりわけ、子どもに対する常識という枠をはずして、アングルを変えてみれば、子どものこれまで見えなかった姿が見えてくるはずです。では、臨床社会学の視線で、子どものスナップ写真を撮ってみましょう。

＜自分のことは自分でしなさい＞

食事中、手の届かないところに使いたいお醤油があったら、あなたならどうしますか？

「ちょっと、お醤油とって」と声をかけるでしょう。最近、この「お醤油とって」と声をかけられない子が増えています。

私の主宰するキャンプでの出来事です。十人で一つのテーブルで食事をしていました。Ｋ君はお醤油を使いたかったのですが、自分が座っているところから遠くにあって届きません。でも、「お醤油とって」と言えなくて、その場を立ってお醤油をとりに行きました。しかし、今まさにお醤油をとろうとしたとき、反対側から「お醤油とって」という声がかかります。Ｋ君がとろうとしたお醤油は、反対側に行ってしまいました。でも、Ｋ君は「お醤油とって」と言えません。そこで、今度はその反対側まで行きます。そしてまたとろうとしたとき、ちがう側から声がかかり、お醤油はそっちに行ってしまいました。「母を訪ねて三千里」ではありませんが、「お醤油訪ねて三千里」の旅が始まりました。Ｋ君はテーブルの周りをぐるぐる回っているのです。

Ｋ君に訊いてみました。「どうしてお醤油とってと言わないの？」。すると、いつもお母さんに「自分のことは自分でしなさい」と言われているので、とってもらってはいけないものだと思っていたと言うのです。実は、Ｋ君は「自分のことは自分でしなさい」という呪文にかけられていたのです。

でも、自分のことを自分でしていたらどうなるでしょうか。聡明な皆さんならお分かりですね。独りぼっちになってしまうのです。誰ともコミュニケーションをとらず、ひとり黙々と何かをしている子どもの情景を想像するだけで、何かとても寒々しい感じがしてなりません。一般的に、自分のことを自分ですることが「自立」であると考えられていますが、そのことは同時に、人とのコミュニケーションがとれず、「孤立」してしまう危険性を孕んでいます。そして、「自分のことは自分でする」を繰り返していると、自分のことしか考えられない、自分のことしかやらない、いわゆる「自己中」を育てることになるのです。

また最近、「かくれんぼ」ができない子どもが増えています。隠れていて、見つけられなかったらどうしようという不安に絶えられず、すぐに見つかる所に出てきてしまうのです。そして、見つかったら「ああ良かった」と安堵するのです。これでは、「かくれんぼ」になりませんね。しかし、このことは、今の子ども達が置かれている社会的状況を良く現しています。子ども達はいま、自分の居場所を自分で見つけられないでいます。だから誰かに見つけてもらいたいのです。つまり、自分を見つめ、認めてくれる他者の不在が、彼らをして「かくれんぼ」ができない状態にしているのではないでしょうか。

この「かくれんぼ」の恐怖から、彼らを救ったのが携帯電話です。ある携帯電話のコピーで、「○○なら、いつでも誰かとつながっています」とありました。誰かとつながっている、誰かが見つけてくれるということが、孤立化する子ども達の心性にヒットして、携帯電話が爆発的に売れたのです。

いずれにせよ、「自分のことは自分でしなさい」と言われて孤立化し、自分の居場所を見つけられずに浮遊している子ども達が、年々増えつづけています。

＜自分のことは自分でしない＞

そこで、私の主宰するキャンプでは「さ」をとって「自分のことは自分でしない」で活動しています。つまり、「セルフサービス」がないということです。人のことをしてあげたり人にしてもらったり、頼んだり頼まれたりしながら、コミュニケーションを紡いでいきます。

ちょっと内気で、みんなの中に入っていけず、自分のことを自分でする子がいました。その子をお茶の入ったやかんの前に座らせました。みんなから「お茶下さい」と言われると、自分の食事をおいて、みんなのお茶を入れてあげます。そのうちに、「お茶のおかわりありませんか」と、みんなに訊くようになりました。そして「お茶ぴー」というあだ名まで付けてもらい、お茶の世話をしているうちに、すっかり、みんなの中にとけ込むようになっていました。

もともと、子どもは世話好きです。自分のことをするより、人のことをしてあげるのが大好きです。そして、人の世話ができてはじめて「自立」が「孤立」でなくなるのです。

そこで、子ども達といっしょに食事を作るときに、「ご飯隊」「かまど隊」「おかず隊」といったそれぞれの役割担当のグループ(隊)に加えて、「頼まれたい(隊)」という隊を作りました。この隊は、他の隊から、たとえば「水を汲んできて」とか、「薪をもってきて」とか頼まれると、そのことをその隊の一員として取り組むのです。驚いたことに、この隊への入隊希望が殺到しました。なぜなら、頼まれるということは、自分が信頼されているからであり、そこに自分の存在意義、つまり居場所があるからです。そう、子ども達の居場所は、部屋といったハードウエアーにあるのではありません。友達や親、先生といった人との関係(ハートウエアー)の中にあるのです。

ただ、「頼まれ隊」だと、頼まれない限り動かないという受け身になってしまいます。そこで、今年から「頼まれ隊」改め「ご用聞き隊」にしました。つまり、「何か頼まれることはありませんか？」と、ご用聞きに各隊を回るのです。このように子ども達は頼み頼まれる関係から、豊かなコミュニケーションを育み、信頼関係を培っていきます。

今、巷では、子ども達の学力低下が話題になっていますが、それよりも、コミュニケーション能力の低下の方が深刻です。なぜなら、これは社会で生きていくための基礎的な学力だからです。不登校やいじめなど現代の学校教育をめぐる多くの問題は、友達や親、先生とのコミュニケーションがとれないことに起因している場合が多いのです。そして、それは「自分のことは自分でしなさい」と言い続けられることによって、コミュニケーション機会を奪われてしまった子ども達の悲痛な叫びでもあるのです。

ところで、あなたは、「自分のことは自分でしなさい」の呪文にかかっていませんか？

参考文献：杉本厚夫『自分のことは自分でしない』
ナカニシヤ出版

# 学校行事とともに

附属京都中学校　教諭　垂　井　由　博

――― 秋休みのある一日、夜の教官室で、一人机に向かっていた。締め切った室内にふと息苦しさを感じ、背後のドアをあける。昼間とはうってかわった涼しい秋の夜風とともに、一羽のチョウが舞い込んできた。ふらふらと進路もあぶなげな飛び方に、命の終焉を感じる。テラスに出ると、一匹のカマキリが頭をこちらに向けていた。腹は大きく膨らんで、産卵の直前だろう。肌寒さも感じる夜風の中で、微動だにしない。しばらく続いた暖かさに生き延びてきた夏の虫たちも、この涼しさでは、おそらくもう命は持つまい。夏の虫にかわって鳴き出した秋の虫の音に、もの悲しさを感じる。その秋の夜の静寂を、無粋にも一台の暴走バイクの爆音がかき乱していった。学校をほのかに照らす月は、ほぼ満月。―――

これは、私が3年学年主任をしていた2000年の10月に、学年通信に記した一節です。附属京都中学校は、このように、都会にありながら四季の移ろいを肌で感じることができる環境に恵まれています。校内にあふれる木々は、紫明通の緑樹帯の木々とも一体となり、多くの野鳥が訪れます。この地は、京都教育大学の前身、京都学芸大学のあった場所。現在の大学キャンパスが緑にあふれているのも、こうした伝統が継承されているのかもしれません。

緑あふれる校内風景

さて、私が、この附属京都中学校に赴任したのは1992年ですから、いつのまにか13年が経ってしまいました。そして今から30年前の1975年、私はこの附属京都中学校に生徒として入学しています。つまり、現在、私は自分の母校に勤務しているわけで、何か、感慨深いものがあります。

私が中学生だった頃は、学校の周囲は閑静な住宅街で、これといった商店も少なく、北大路通をガタゴトと走る市電によって、多くの生徒が通学していました。大型商業施設や地下鉄のターミナルが近くにでき、大きなビルが学校周辺にも数多くなった現在に比べて、のんびりとした風景でした。

そんな当時の学校生活で、何よりも思い出されるものといえば、学校行事です。息もつく間もなく次から次からやってくる学校行事。その行事の取り組みのために毎日通学していたのではないかと思えるほどです。とりわけスポーツを大の苦手としていた私にとって、数多くの体育的行事には閉口しました。

その一つが、賀茂川河川敷を出雲路橋から雲ヶ畑岩屋橋までの往復28kmを走歩する「能力遠足」。事前の約1か月間、毎日、全校生徒がグランドを周回して練習を積みます。いよいよ迎えた当日は、動かなくなった足をひきずりながら何とかゴール。ほとんどの生徒が体力の限界に挑戦していました。交通事情の悪化により、残念ながら10年程前に姿を消しましたが、中学生のときはあれほど苦労した行事も、今ではよき思い出。そのときに成し得たことが、大きな自信につながっているようにも思えます。

能力遠足（1977年）

そんな行事としてもう一つ忘れることのできないものに、1年生で1時間30分の遠泳をおこなう「臨海学舎」があります。事前に5日間にわたる水泳訓練を受け、まったく泳げなかった生徒も泳力をつけて臨みます。3泊4日の「臨海学舎」の最終日が、遠泳を行う日です。小学校6年生の水泳大会で、平泳ぎの学年最低記録を持つほど水泳も不得意の私にとって、遠泳はまさに地獄。足もつかぬ海で、自分の力で泳ぎきらねばなりません。案の定、1時間を過ぎた頃から、だるさとともにやめたい気持ちにおそわれました。しかし、学年生徒全員が、整然と隊列を組んで泳ぐ遠泳に

おいて、自分一人やめるわけにもいかず、体力の限界を感じながら、何とかゴール。そのときの何ともたとえようのない充実感は、今でも忘れません。

臨海学舎（1975年）

人が限界に挑戦するとき、真の人間性が発揮され、真の友情が生まれる。そして望ましい集団が形成される。人は自分の姿を知り、お互いに励まし合う。これらの行事の体験は、直接ことばでは言い表せない、何か今を生きる力の源となっているようです。そして、私たち同窓生が、決して忘れることのない共通体験となっているのです。

苦労しつつも自分にとって今を生きる糧となっている当時の学校行事を、今は後輩となる今の生徒たちに伝える立場となり、この行事が、長年続けてきた伝統と経験により、あらゆる場合を想定した緻密な計画にささえられていることを知りました。臨海学舎は、当時に比べて遠泳の時間短縮や日程の変更はあるものの、今でも毎年続けています。1年生だけの行事にも関わらず、教員全員が引率し、水泳指導の補助員の力も借り、並々ならぬ体制と教員の尽力、長年培われたノウハウで支えられています。

本校の歴史をまとめた、1965年発行の「十七年の歩み」のなかで、臨海学舎について、次のように紹介しています。

――― この行事の歴史は古い（昭和六年）。本校創立直後（昭和二十六年）、附属京都学園の臨海学舎として、福井県大飯郡高浜町内海岸に、附属小学校、中学校が開いてきたものである。そして、その計画は四泊五日にわたって、水泳指導はもちろんのこと、生活指導、学習指導、娯楽指導にいたるまで、その緻密さ、周到さを示している。（中略）

「高浜を開発したのは、附属京都学園である」と先輩諸氏は誇っている。それほど、高浜は美しく、静かで、素朴だったというのであろう。（中略）

そして、高浜の町も海も姿を変えていった。海岸の砂浜は狭くなり、石ころの多い遠浅には、中学生を十分楽しませ、十分鍛えることのできないうらみを感じさせた。また、観光地として発展しようとする町は、人多く、風紀乱れ、中学生教育の場としては、不安を感じさせた。

そこで、第二の高浜をさがそう、第二の高浜開発をやろう、そんな声が昭和三十七年頃よりおこり始めた。高浜の風光、タイコの響きにあわせて整然と泳ぐ附属健児の遠泳という名物、数々の愛着はあったが、いよいよ昭和三十九年度より、京都府竹野郡網野町の浜詰海岸に所をうつした。ここの自然はすばらしい。砂浜が広く遠く、海はおだやかで遠浅ではなく、松林に夕陽に風光も申し分がない。しかし、町はいかに静かで素朴であるとしても、旅館は狭く、不自由で、都会の中学生を満足させるには程遠い。やがて附属中学校は、また浜詰を開発していくことであろう。―――

そして現在、1965年の予言通り、浜詰の町も、海も、当時とは比にならないくらい姿を変えました。当時2軒しかなかった旅館は、現在50軒を越え、防波ブロックの設置により海は遠浅となり、広大な砂浜も人で溢れかえっています。美しい夕陽を売り物に、浜詰は一大観光地化してしまいました。すると、先輩諸氏の通り、そろそろ第三の高浜をさがす時期にきているのかもしれません。しかし、場所は変われど、昭和6年を源とする70余年の歴史あるこの行事の理念は、変わることはないでしょう。

時代の流れとともに教育の内容も大きく変化する昨今です。新しく赴任してくる教員の中には、なぜこのようなリスクの大きい、ある意味時代遅れの行事を存続するのかといった疑問も寄せられます。しかし、時代の変化にも普遍のものもあるはずと私は思っています。卒業生としての立場でいえば、附属京都中学校がいつまでも変わらないでいて欲しいもの、それは校舎でも教員でもありません。私たちが今を生きる力の源、私たちを育てた私たちの共通体験の存続。それが卒業生の願いであるのです。

臨海学舎（1995年）

# 今、環境教育実践センターでは

環境教育実践センター教授　梁　川　　正

○環境教育実践センターの誕生

昭和24年の京都学芸大学創設時、京都府師範学校、京都青年師範学校から引き継がれた農場は、丹波町高原農場、紫野農場、深草大亀谷農場の3カ所、計1,371ａの規模で、その後、何度かの変革を経て、現藤森学舎開設に続いて、昭和33年に、丹波町高原農場、紫野農場を深草第二学舎の現在地に約100ａの規模に移転集約されました。そして、昭和47年に農場規定を制定し、学内措置の全学附属農場として、大学内外に広く利用されてきました。一方、昭和47年に京都府北部の熊野郡久美浜町（現京丹後市久美浜町）に臨海実験実習室が設置されて利用されてきました。平成4年4月に、この附属農場と臨海実験実習室の改組により、環境教育実践センターが深草第二学舎内の附属農場の場所に設置され、全国の教育系大学の中で初めて「環境教育」と名付けられた文部省令（当時）に基づくセンターが誕生しました。

○環境教育実践センターにあるもの

伏見区深草越後屋敷町の第二学舎内にある本センターは、本学藤森学舎より西約1kmの位置にあり、附属高等学校、男子寮、女子寮、国際交流会館に隣接しています。都市の中ですが、センターに入ると、教育や研究のために、容易に自然や植物に触れられる環境を維持しています。総面積は約10,000㎡で、平成8年に竣工した二階建ての管理棟があり、その中には講義室や実験室等があります。この建物の地下には雨水を貯える雨水槽を備えて、栽培学習園の植物の潅水に利用する他、屋上には太陽光発電設備を有して、建物の電気設備に電気を供給しています。また、100㎡のガラス温室2棟、70㎡のビニルハウスがあり、40ａの畑と10ａの水田からなる栽培学習園の他、花壇、果樹園、樹木見本園等があります。この他、平成16年度に環境教育有機物リサイクルシステム実験実習棟が設置され、有機物リサイクルシステムの運転を行っています。

なお、センター設立後、久美浜の臨海実験実習室はセンター附属の久美浜フィールドステーションと改名されて現在に至っています。

○環境教育実践センターの目指していること

本センターは、環境教育に関する専門的な教育を行い、かつ、学生等の実験実習の場としての利用や公開講座等、広く一般の利用に供し、もって環境教育の推進を図ることを目的としています。とくに、栽培学習園を利用して、野菜や花卉、作物等を栽培して、本学学生に対しては実習や実験等の関係する授業で、附属学校園をはじめ近隣の学校園等の園児、児童、生徒及びその保護者に対しては学校園外活動や育友会活動等で、地域の方には公開講座、公開講演会等で、「いのちを育てる」栽培活動を通して、自らが汗して活動することこそが地球環境を守ることにつながるということを目指す体験的教育による環境教育の実践的活動を行っています。同時に、限られた自然の中ですが、多様な植物を栽植、栽培、利用、循環していますので、これらを生かして、プラント・ミュージアムのような機能をもつセンターとして内容を整理、充実していくことも目指しています。

○環境教育実践センターで行われていること

（1）環境教育ならびに環境教育実践に関する論文及び報告を掲載する「環境教育研究年報」を平成5年以来毎年発行し、平成17年には第13号を発行しています。

（2）京都市教育委員会と共催する「環境教育に関する現職教員を対象とした研修会」を平成5年から毎年実施しています。

（3）一般市民や幼稚園等の教諭を対象とした「環境教育に関する公開講座」を昭和63年以降毎年継続して実施する他、一般市民に対する公開講座も平成4年から毎年続けて実施しています。また、本学教職員及び学生に対する学内講演会を平成6年から継続して実施し、平成10年からは対象を地域住民にも拡大した公開講演会を毎年実施しています。

（4）平成8年にはセンターが中心となって、「教員養成における環境教育推進に関する国際シンポジウム」を開催し、中国、タイ、オーストラリアから研究者を招いて、アジア、オセアニア諸国と日本における環境教育の現状や学校での実践の現状について、ともに討論を行って理解を深めました。さらに平成10年には「学校における環境教育－学習から日常的活動へ－」と題した教員養成大学・学部研究集会をセンターに関

連する兼任教官が協力して開催しました。

（5）栽培学習園での活動内容

センター内には、果樹園、樹木見本園において約80種の木本植物が栽植されており、栽培学習園、ガラス温室、ビニルハウス、花壇では毎年約140種の草花や野菜、作物等の草本植物を栽培しています。例えば、春からは畑ではトウモロコシ、サツマイモ、アマリリス等に加えて、ガラス温室やビニルハウス内ではサルビア、マリーゴールド等の苗の育成を、夏からはハボタン、ネギ等を、秋からはパンジー、デイジー等の苗の他、イチゴ、タマネギ、ホウレンソウ、チューリップ等を栽培しています。水田ではイネの栽培を行い、4月下旬のモミまき、5月下旬の田植え、10月の刈り取り、脱穀、もみすり等を行い、裏作にはマメ科のレンゲを育てています。

①本学学生への授業では、専攻専門の「環境植物学実習Ⅰ、Ⅱ」、「栽培実習Ⅰ、Ⅱ」、「環境園芸学実験実習」等の授業において、栽培学習園等で植物を実際に栽培する活動を通した環境教育の実践を行っています。この他、小学校教科専門の「小学校教科専門理科」や総合の「近代産業技術Ⅱ」の授業でもセンター内で植物や栽培に関わる実習や観察を行っています。また、平成16年度に設置された環境教育有機物リサイクルシステム実験実習棟では、有機物リサイクルシステムの運転を継続して行っており、学生寮の生ゴミ、栽培した植物残渣の粉砕物、剪定した樹木枝の粉砕物の他、地域の家庭の生ゴミ等を毎日発酵槽に投入し、投入後、発酵槽内の微生物によって48時間で堆肥が生産され、生産された堆肥は堆積しておき、ふるいで大きさを一定にし、そして、堆肥の水分を調整してからペレット装置でペレット状にして、最後にそれらを乾燥機で乾燥させてペレット状の堆肥を作成しています。平成17年度の授業の中で、栽培したトウモロコシ等の茎葉を粉砕して発酵槽に投入し、得られた堆肥をペレット状堆肥にする等の有機物リサイクルの実習を行っています。

②公開講座「幼稚園の自然観察・栽培・飼育実技講座」では、幼稚園教諭を対象として、各回の講義の後、圃場や鉢等で草花や野菜の栽培実習を行って、その実際的技術の向上をめざしています。また、公開講座「シリーズ環境を考える」では、地域の自然と地形の学外での観察や動物の絶滅と保護についての講座の他、センター内の春と秋の樹木観察に関する講座も開設しています。

③地域の小学生を対象として、平成11年度から大学等地域開放特別事業「子どもとともに行う作物の栽培体験教室」、大学等開放推進事業「植物栽培と植物の不思議さ体験教室」、子どもゆめ基金助成事業「野菜や草花を栽培して育てる楽しみや不思議さ、大切さを学習する体験教室」等を毎年続けて開催して、子どもたちとともに、植物栽培、無菌培養、植物観察、もちつき等の活動を行っています。

④京都市立中学校の「生き方探求・チャレンジ体験」推進事業に対して、本センターは教育委員会仲介事業所として協力し、平成13年度以降、毎年継続して中学生を受け入れて、植物の栽培管理等の作業を体験してもらっています。

⑤附属学校園ならびに近隣の公立と私立の学校園等、とくに、幼稚園、保育園ならびに養護学校が、施設の見学も兼ねて、ジャガイモ、サツマイモの掘り上げ、タマネギの植えつけと掘り上げ、イネの田植えと刈り取り等の活動を学校園外活動と位置づけて毎年継続して利用され、それらの栽培管理に協力しています。

⑥本センターの敷地の一部と本学宿舎跡地をあわせて、環境共生園として京都伏見の里山の樹木を栽植して、自然観察体験教育を行う場の造成を、美術科の岩村伸一教授の「作庭実習」という授業を中心として進めています。

上記の公開講座を始め、大学内外の自然や環境に関わる研究、教育の場として、年間のセンターの利用者は5,000～6,000人を数えています。

# 違いを求めて

平成16年度日本語・日本文化研修留学生　MOROZOVA, ANTONINA YEVGENIVNA
（モロゾワ、アントニナ　エフゲーニフナ）

私は日本とウクライナとの間の違いについて説明するように依頼されましたが、それは私にとって極めて難しい問題です。

これまで私はその問題に関して深く考えたことがなかったこともあり、ある一日をその違いを捜し求めるために使うことにしました。

そしてその一日は、いつもどおりの朝の電車から始まりました。

ラッシュアワー、たくさんの乗客。座っている人も立っている人も、ほとんどの人は朝の心地よい夢の続きを追い求めているように見えます。一分でも長く。でも中には生真面目な顔をして新聞や本を読んでいる人もいます。学校に連れて行くのか、子供を連れた母親。次の駅で乗ってきた同級生を見つけて歓声を上げる子供たち。目の前のおばあちゃんに気づかぬように寝たふりをする若者たち。そして、実はどっちが疲れているのかは誰にもわからない。この朝、私は初めてウクライナの電車と日本のそれとの違いに気がついたのです。日本の電車のシートはベルベット。ウクライナは人工皮革。ウクライナのつり革は日本のよりも少し高い位置にあります。

そして違いの発見は大学でも続きます。新たな朝の学生たちの元気な声。昨日の出来事を伝え合い、今度のレポートが難しすぎるとか何とか言っています。

大学。一生の友達を見つけるところ。恋をし、悩み、いろいろな出来事を経験し、そして大人になるところ。もちろん、勉強するところ。大学のようなところでも、私は日本とウクライナとの違いを発見します。ウクライナの大学は周囲の環境との間の境界がありません。普通キエフの大学の学部の建物は街中に点在し、一見しただけでは周りのビルと区別がつきません。勉強に関しては、ウクライナでは選択科目というものがありません。教育プログラムはすべて教育省が定めたただひとつのものがあるだけです。

今日は私は午後は授業のない日なので、買い物に出かけました。そろそろ、ひとーそれなしでは社会全体を見ることができないものーについて話すときが来たようです。私が話したいのは「おばあちゃん」たちのことです。彼女たちは家事を済ませ、外出し、買い物に出かけたり、友達の家に行たり、近所の人と話したりします。彼女たちは何でも知っているように見え、いつでも喜んで誰にでもアドバイスをしたりします。彼女たちは家族こそ最大の価値のあるものだという確信を抱いています。彼女たちによれば、世界のすべての災厄はどれも子育てが原因なのです。子供時代を戦争の惨禍の中で送った、愛すべきおばあちゃんたち。あなたたちは、満腹と健康が人生でもっとも大切なことで、そのほかはすべて時間が解決するものだということを誰よりもよく知っています。その「少女」たちは、次から次へ「あめちゃん」が出てくる「魔法のかばん」を持ち、彼女たちと話す人は誰でもその「あめちゃん」がもらえます。

日本とウクライナのおばあちゃんたちに違いがあるという人は、ある意味では正しいです。服装が違います。ウクライナのおばあちゃんたちはよく頭にスカーフを巻いています。ほとんどスカートしかはきません。言語が違います。彼女たちは日本のおばあちゃんと違いウクライナ語で話します。

ショッピングモールを歩いていたとき、もうひとつの違いに気づきました。ウクライナでは夏のバーゲンは八月の終わりに始まりますが、日本では七月の初めに始まります。

そして目を輝かせて買い物をする母と娘たち。長い間、私は母と買い物に行っていない。。。

夜が近づき、三条駅に急ぎます。そこで友達と待ち合わせをしているのです。鴨川のほとりにはたくさんの人がいて、花火をしている人も多いです。確かにキエフにも川も花火もあります。でも川はもっと大きく、花火はもっと安物です。

友達とは楽しい時間を過ごしました。ウクライナとの違いは母語で話しているかどうかの違いだけです。

帰りも満員電車でした。若いカップルが私の前に座っていました。女の子が頭をボーイフレンドの方にもたせかけたとき、私は自分がキエフと同じくらい京都を愛していることに気づきました。それはキエフや京都だけでなく、人が生きているところなら私がどこに対しても感じる愛なのです。

私の周りにひとがいる限り、文化の違いなど私には何でもない問題です。

# 楽しい学校になるようにみんなでがんばります！－児童会の取り組み－

附属桃山小学校　副校長　　川　端　建　治

「この学校をどんな学校にしたいですか？」

児童会の運営委員さんの問いかけに、2年生以上の各クラスから選出された代表委員の子供たちが、次々に自分の考えを出し始めます。

「自分からゴミを拾って、きれいな学校にしたいです。」「声を掛け合って、あいさつし合える学校にしたい。」「規則を守れる学校にしたいです。」「みんなが、積極的に行動できて、一緒に楽しめる学校にしたいです。」

代表委員から出されてきたさまざまな意見を整理しながら、話し合いは、「楽しいと思える学校づくり」という、みんなの共通の願いを考えていくことになります。そのために、児童会でどんなことに取り組めばいいか、どんなことをしたいか、さらに代表委員からの意見が続きます。

「つゆくさグループでゴミ拾い大会をしたい。」

「みんなが楽しめる楽しい取り組みをしたい。」

「クイズ大会」「スタンプラリー」「大縄大会」

「学級対抗のドッジボール大会をしたら、みんなが参加できます。」

等々、話し合いは、子供たちらしい「楽しい取り組み」に集中していくことになります。このような話し合いが、高学年のフレンドキッズ（異年齢活動集団）の「集会」係との連携によって原案化され、さらに学級の考えも盛り込まれて、各学期ごとの児童会主催の取り組みとして、計画されていきます。

下の写真は、このような計画が、スタンプラリーとして子供たちの手で立案され、運営された時の一こまです。（各ポイントで、係がさまざまなコーナーを作り、参加児童に対応している。）

絵しりとり

本校では、子供たちが自分たちの学校生活や学級生活を自分たちでよりよいものにしていける力を育てるために、児童会活動を学級会活動や異年齢集団であるフレンドキッズの活動やつゆくさグループの活動と結びつけ、子供たちの主体的な発想を大事にした取り組みを行っています。

そこでは、生活適応を含む学級生活や学校生活上の諸問題にも、子供たちが自主的自発的に取り組んでいけるよう、教師は支援する立場に徹し、子供たちの動きを見守りながら、各学級担任・各分掌が子供たちと向かい合う姿勢や考え方を共有し合えるような体制づくりを心がけています。

周りの世界と豊かに関わり、自分たちの生活上の問題を自ら解決するために、ねばり強く取り組んでいく。そんな力が育つための環境は、今、子供たちの周りからどんどん奪われているのではないでしょうか。まさに、「子供たちの手による学校文化づくり」をどう進めていくかが、子供の豊かな育ちを生み出すために、私たち教師に科せられた重要な課題であると思われます。

その意味で、学級（学年・学校）経営の構想・実践において、私たちは、たえず自分たちの取り組みを「子供たち自身による学級（学年・学校）づくりの支援」という立場から見直していこうとしています。そのことは、学習指導においても同様で、「子供自身の必要から生まれ、子供自らが発展させていく学習の組織化と支援」という立場で、子供たちへの関わり方を考えていこうとしているところです。

# 全校縦割り活動「春の仲良し遠足」

附属京都小学校　副校長　　多　田　光　利

平成13年度の本校の研究のひとつに、「縦割り活動」という取り組みがあげられている。すなわち、「『集団の中で生きる力、集団を生かす力』というような人間関係を作り上げる力の獲得は、成長と共に次第に経験によって身につけていくものである。それは、家庭生活の中での経験であり、学校や地域社会の中での経験なのである。ただ、家庭や地域社会の教育力の低下している昨今では、なかなかそういう経験を積んでいくことが期待できにくい状況にある。そこで、学校教育の場でも、主に縦割り集団の場を設定する中で、『受容』と『はたらきかけ』という観点で子どもの育ちを図っていく。」ということが述べられている。

本年度も、全校縦割り活動として「春の仲良し遠足」を5月13日（金）に実施した（予定では、5月6日であったが、雨天のため13日に延期）。実施に先がけ、4月28日（金）の3、4校時には「縦割りグループ初顔合わせ」、リーダーとなる6年生全員には4月27日（木）6校時に事前のオリエンテーションをし、初顔合わせ当日のめあてや進行内容の確認を行った。

今年度は、6年生が108名いるので108のグループを作り、その108のグループを3色に分け縦割り色別チームとした。どのチームも1～6年生までそれぞれ1名ずつ、計6名で1グループとなることを原則とするが、学年の人数の関係で、同じ学年の児童が2人になったり、ある学年の児童がそのグループにはいなかったりということもあり得る。また、例えば1、3、5年生が男子なら、2、4、6年生は女子というように男女混合とし、108のグループを18のブロックに分けて各ブロックを1～2人の教師が担当することにした。さらに、兄弟（姉妹）がいる場合は、同じブロックにはならないように調整もした。そして、5月13日（金）当日、お弁当を持って府立植物園まで出かけた。

今年度のねらいは次の3つ。

○リーダーを中心として、散策や昼食の中で、グループで楽しく活動することが出来る。

○グループのメンバーは、リーダーの話を聞きながら、お互いに協力し合い仲良く活動しようとすることが出来る。

○リーダーは、1日の活動の見通しを持ち、グループの活動がスムーズに進むように、それぞれのメンバーの話を聞いたり、声かけをしたりすることが出来る。

午前10時頃からブロックごとに出発し、歩いて植物園まで。そして、園内ではグループごとの活動となり、午前中は指定された3つのポイントを探しながらの散策。グループごとにお弁当を食べ、食べ終わったグループから芝生広場でゲームなどをして遊ぶ。午後1時30分に集合し、ブロックで人数確認をしてから学校へ向けて出発した。

まだまだお互いのことがわからず手探りの状態だが、遊びの時間をたっぷり取って活動したことが、緊張をほぐすことにつながっていった一日であった。

# はじめての沖縄修学旅行

附属桃山中学校　副校長　　多羅間　拓　也

5月24日から27日まで3泊4日の日程で、本校の3年生が沖縄への修学旅行を行ないました。本校としては初めての「沖縄修学旅行」でしたので、今回は多くの不安を抱えておりました。はじめての航空機の使用、はじめての場所での学習や体験活動、はじめての宿泊形態、等々の不安もありましたが、何より、梅雨のさなかで、天候を大変心配しました。ところが、沖縄の梅雨は本州のそれとは違い、ジメジメと降り続く日はなく、海洋性の気候でした。前半こそはやや不安定ではありましたが、幸い戸外での活動時に雨が降ることはなく、後半は南国独特の見事な晴天でした。

1日目は、平和祈念資料館で平和学習をし、2日目は、読谷村周辺で、沖縄戦跡や座喜見城などでの平和学習や歴史学習をしたあと、珊瑚礁海岸で自然観察をおこないました。3日目は、コース別の体験活動（カーカヤック、シュノーケリング、琉球舞踊、空手、お菓子作り、サンシン）のあと、全員でサトウキビの収穫と黒糖づくりを体験し、嘉手納基地を見た後、那覇に移動しました。最終日は、首里城見学と国際通り散策のあと、那覇から学校に帰りました。

大変盛りだくさんの内容でしたが、2年生後半からはじめた事前学習の成果と、生徒のまじめな学習姿勢もあって、沖縄独特の、歴史、自然、風土や文化に直に触れ、学びの多い、大変充実した4日間を過ごしました。

中でも、平和祈念資料館での戦争体験者の講演や、ガマと呼ばれる洞窟で聴いた現地ボランティアによって語られた沖縄戦独特の悲惨な現実は、生徒達の心を大きく揺さぶる内容で、あらためて平和の尊さを認識させる学習になりました。とりわけ沖縄戦体験者の講演では、生徒とほぼ同じ年齢で学徒兵として徴用され、飢えと渇きの中で、泥沼の戦場を敗走し続けた体験を、生徒に熱っぽく語られたため、生徒は大きな感銘を受けていました。

一方、どこまでも透き通った美しい海をはじめ、沖縄特有の自然や風物に感動した生徒も多く、いつまでも生徒の思い出に残る修学旅行になりました。

来年度から、本校のすぐ近くの市立中学校2校が、沖縄修学旅行に取り組むことになり、企画立案に協力を求められています。以前、本校で取り組んでいた山口県での修学旅行が、「新しい形の修学旅行」のモデルとして取り上げられたことがありますが、今年度からの沖縄修学旅行も、改良を加え、「今後の修学旅行」のモデルとして生かされるようになればと思っています。

# 総合学習で日本の文化に触れる

附属京都中学校　副校長　　橋　本　雅　子

本校では、2年生の総合学習の時間に『国際理解』をテーマに生徒が主体で調べ学習や体験学習に取り組んでいます。前半は、外国の文化を知る前に、日本の文化について調べ、体験します。そして、体験した内容をタイ国の生徒が日本（本校）を訪問した際に実演し、日本文化について説明をします。今年度は、次の日本文化に挑戦することになりました。

① 華道　② 茶道　③ 和太鼓
④ 三味線・箏　⑤ 舞踊　⑥ 民芸

華道は、池坊次期家元の池坊由紀さんに教えて頂いています。和の心から花のいけ方まで、毎回、映像を用い説明して頂いたり、お手本を示して頂いて、日本の美意識や哲学について学んでいます。子どもたちは、男子生徒も多いなか、自分の作品つくりに没頭しています。先日は、前期の終了にあたって、大きな作品を共同でつくり、前期の修了証書をいただきました。とても充実した時間を過ごせたようです。

茶道は、裏千家の鈴木先生に教えて頂いています。お手前の仕方から作法やお客様をお迎えする心得など毎回、一人ずつ丁寧に教えて頂いています。タイから来られる皆さんには、日本の茶道にふれて頂けると思います。

和太鼓は、プロとして国際活動もしておられる『バチホリック』の皆さんに指導をして頂いています。はじめは、プロの皆さんの演奏に圧倒されていましたが、現在では、力強いバチ裁きで『創作太鼓』に取り組んでいますが、体力も必要なようです。

三味線は、菊津華美登里さんに指導して頂いて『地唄』に挑戦しています。和室に正座をしながら演奏するのは、大変なようですが、チントンシャンと指使いや音の取り方を教えて頂いています。

箏は、本校の岩﨑教諭が担当しており、『さくらさくら』や『茶摘み』に取り組んで日本らしい音色を奏でています。

最後に舞踊では、『そうらん節』や『婆娑羅』に取り組んでいます。また、民芸では、『南京玉すだれ』や笛などをプロの民芸団『若駒』の方に教えて頂いています。

このように、本校では、外部から指導の先生をお招きし、本格的に日本の文化を体験・体感しています。これらの取り組みは、今後国際交流・理解につながるものと確信します。

# サマー・プログラム　PART Ⅱ

附属幼稚園　副園長　　川　端　智　江

3歳児が通園可能な範囲として、所要時間が公共の交通機関を使って、30分以内が入園の条件になっています。広範囲のため、家庭に帰ってから幼稚園の子ども同士や地域の子どもと遊ぶことが少なく、母子で過ごしたり、けいこ事に通ったり…と、子どもが群れて遊ぶ環境は園にしかないのが現状です。

昨年から夏休みに教育課程外に、夏の遊びを楽しむ「サマー・プログラム」を企画しています。「サマー・プログラム」では幼児教育専攻の3・4回生をリーダーにして5・4・3歳児を混合した1グループ6人で遊びます。今年は二日間連続参加で3回設けました。希望者が多く今年も抽選になってしまいました。

「サマー・プログラム」のロゴ入り麦わら帽子で登園します。セミ時雨で「おはよう」が聞こえません。裸足で遊びます。裸足が苦手な4歳児がおそるおそる爪先を地面に着けてみます。5歳児が「行くよー」と声をかけると、「痛いっ！」と言いながらもあとをついて歩き出しました。

虫取り網を片手にサクラの木の下でセミ取りが始まります。子どもには届かない所にセミが留まっているので、A「とってー！」。リーダーの学生もセミ取りの経験が少なく、子どもの期待通りには取れません。見るに見かねた教員がサクラの木に登って…キャッチ！「すごい！」という子どもと学生の声に我を忘れて、セミ取りです。A「どこにいれる？」B「あそこに牛乳パックがあるから、虫かごにしよう」と必要なものは自分たちで作ります。モールや穴開けパンチ等を使って作り、セミを入れようとすると、セミは網の中でジッーと大きな音を出して動き回ります。やっと捕まえて入れようとすると、パックの入り口が小さかったのか羽を広げてジジジーと飛んでいってしまいます。「アーッ！」思い通りにはなりません。H先生は子どもの頃を思い出し、セミに糸を付けて飛ばしました。「ぼくも！」とBが飛ばすとセミは周りをグルグル飛んで、逆に自分が糸で縛られてしまいました。「わらしべ長者」のようにセミを飛ばす事に子どもの興味が集まりました。

ホースの先に穴をあけたパイプを付けて、噴水を作りました。シャワーとは違う下から吹き上げる水の感覚や、その周りにできたぬかるみで、ヌルヌル、フワフワ、なま温かい感触を手や足、おしりで確かめて、どろんこになっては噴水で落とす遊びを繰り返し楽しんでいました。

遊び始めて10分も経っていないのにCが保健コーナーの入り口に寝そべっています。私「しんどいの？」C「ぼく、エアコンがないとダメやねん」私「エアコン？この部屋はエアコンかかってないよ。気持ちのいいエアーが吹いている所に連れて行ったげよ」とイチョウの木陰に行きました。麦わら帽子に付けるリボンがパラソルの下で風に揺れています。「ほら、いい風が吹いているでしょ。イチョウのお母さんが涼しい風を作ってくれるのよ」、木陰の心地よさを感じるひとときになったかな？

シャワーで汗を流し、グループで集まっておやつや園の畑で出来たキュウリ、トマト、ナス、オクラなどを食べました。放し飼いのウコッケイのイチゴちゃんも仲間に入ってきて、手にしているパンを食べられそうになったDは「イチゴちゃんを（小屋に）しまって！」と叫んでいました。

園庭の自然と遊ぶといっても、セミ、ウコッケイ、水、泥、砂、夏野菜などほんの少しの環境なのですが、人工的な生活をしている子どもたちにとってはいっぱい発見があり、新しい経験を積み重ねることが出来たと思います。教員たちは、一人一人の子どもとじっくりかかわりながら、同年齢集団では見せない子ども同士のかかわりや表情などを見ることができました。学生たちは4週間の実地教育にはない、指導形態で、自分で二日間の計画を立て、子どもたちの予想外の行動に臨機応変に対応する経験をしました。

# マレーシア研修旅行

附属高等学校　副校長　　斉　藤　正　治

本年7月25日～30日、2年生のマレーシア研修旅行が2団に分かれて実施されました。その様子の一端ですが、以下に紹介させて頂きます。

マレーシア研修旅行は、昨年度に続いて2度目となりますが、今回の旅行は、航空機の関係で人数が制約され、2団に分かれての実施となりました。クラス単位で行動できるマラッカ見学を1団の現地初日と2団の最終日にそれぞれ置き、その間の2日間は両団が一緒（学年全体）に活動する内容としました。

☆空港・飛行機にて

「はーい、2列に並んで。研修旅行委員、点呼お願いね。」出国から何度か繰り返してきた行動がすっかり身に付きました。帰国の行程もこのようにしてすんなり。機中では、「良く出来た生徒さんですね」と乗務員に言われて、ちょっと出来すぎかなと思いつつ、悪い気はしませんでした。

☆高校交流にて

約120人が参加しました。国歌の交換で始まった歓迎セレモニー、とても厳粛な雰囲気、全員制服着用でよかった。「緊張、緊張」といっておられた校長先生の英語の挨拶、堂々としたものでした。「先生、頭、真っ白やったわ。」と後で言っていた研修旅行委員長の挨拶も立派でした。両校の学校紹介が映像でなされた後、歌、踊り、楽器演奏が続きました。時間遅れのため、予定のティータイムはカット。各教室にグループごとに分かれて、互いの伝統的な遊びの紹介、けん玉、羽根つき、すごろく、綾取り、お手玉などです。シナリオ無しの交流に付き添った教師が大戸惑いでしたが、時間が経てば、あちこちに小さな輪ができていました。午後から、着替えてスポーツ交流、サッカー、バスケット、バレー、大縄跳びなど、大汗をかきながら国際親善試合を展開しました。最後のイベント、スリセンパカ高校生徒によるミュージカル「キング　オブ　ジャングル」を鑑賞。圧巻でした。圧倒されました。舞台装置も小道具も、歌や踊りも何もかも素人とは思えない出来映えでした。校長先生が、是非、是非見て下さいとおっしゃったのも納得です。学校に専属スタッフがついているそうです。さて、エンディングセレモニーでの記念品交換も終わり、これで終わりかと思ったところへ、1日の交流風景がスクリーンに映し出されました。宇多田ヒカルの歌をBGMにして。心憎い演出に大喝采でした。その後、ホームステイ組、55人が次々と出発していきました。「プール付きの家やった。」と驚いた生徒、ランプータンを山ほどもらった生徒、大きな誕生日ケーキをもらってきた生徒など、これもまた楽しい思い出深い体験だったようです。

☆森林研究所、バツーケーブにて

約80人が参加しました。森林研究所の場所は、すず採掘跡地に森林を復元したものです。大密林をかき分けてのトレッキングとはいきませんが、スタッフの説明（もちろん英語です）を聞きながら、山道を登りました。そして、最後に樹冠の上の吊り橋（1枚の底板に網の側壁：キャノピーウォーク）を楽しみました。バツーケーブは岩の中に掘られたヒンズー寺院です。これもまた、長い長い階段をのぼって行きます。歩きに歩いた森林研究所・バツーケーブのコースでした。

☆クアラルンプール市内研修にて

20人ずつ、10班に分かれてのKL市内研修です。各班、事前に計画したコースをガイドさんと一緒に行動です。市内を一望出来るKLタワー、アジア一高いツィンタワー、繁華街ブキビンタン、市場風のセントラルマーケット、食材にびっくりな中華街、モノレールと徒歩で動き回りました。途中、ちょっとした自由行動で、迷った人も。でも、最後は全員、無事ホテルに帰着しました。教員も生徒と出会うべく、一日歩き回りました。

☆マラッカ見学にて

クアラルンプールからの最もの長旅です。初日に行った1団は元気、元気でしたが、最終日となった2団のバスは「ドリーム号」でした。途中のゴム園では、実際のゴム樹液を触って「延びるやー。」と大きなびっくり。マラッカでは、クラスごとに丘の上へ。遙かにマラッカ海峡を望みながら、ザビエルが一時埋葬されていた教会跡を見学。古き面影を残すオランダ広場を過ぎ、チャイナタウンへ。ここで解散、散策やショッピングをしながら各自で出発点へ。集合時間が迫っているなか、「デスカウント、ダウン、ダウン・・」と度胸たっぷりに値切っている女子生徒にびっくり。

「交流と体験」の多くの思い出を胸に詰め、全員無事帰国。張りつめていた緊張も解け、「良かったあ」とある教員。

マラッカ海峡を望んで（マラッカにて）

# 今年も夏は、ワークショップ

附属養護学校　副校長　　小　竹　健　一

今年も夏の一番暑い頃、8月4日（木）5日（金）に本校で「第4回東京学芸大学・京都教育大学附属養護学校合同公開講座」が開催されました。この公開講座は通称ワークショップとも呼ばれている非常に実践的な研究会で、東京学芸大学附属養護学校と本校で毎年、交互に開催されています。これまでは附属養護学校の教員のみを参加対象としていたのですが、今回より地域の幼稚園や小・中学校、養護学校の先生方にも案内しましたところ、開催日が夏休み中ということもあり、予想以上の参加者がありました。

今回のテーマは『特別支援教育』と『教材研究シリーズ』の2部構成です。養護学校の教育は、今、「特殊教育」から「特別支援教育」へと大きく変革しようとしている時です。『特別支援教育』の研究協議では参加者の関心も高く、養護学校のセンター的機能や子供たちへの個別支援などについて実践報告がありました。スーパバイザーとして参加頂いた本学名誉教授の岡本夏木先生からは、大学の附属学校はその特色をより積極的に活かすことの必要性などの助言がありました。また、『教材研究シリーズ』では、3グループに分かれ、本校の教員が中心となり、教材開発の実際を行いました。幼稚園・小学部グループは低学年用ブランコ作りです。参加者全員で簡単な工具を使って市販の2×4材で移動可能な簡易ブランコを短時間で完成させました。中学部グループは調理学習題材の「豆腐づくり」に挑戦です。調理学習は比較的多くの養護学校で実践されており、今回は豆から加工を始め、最終は出来上がったものを試食まで、を全員で体験しました。高等部は作業学習の窯業です。今回も大学・美術学科の丹下先生がスーパバイザーとして参加して下さり、私たちに新たな教材を提案して下さいました。

この講座は全国各地の普段の指導実践等（工夫や苦労、自慢話も含め）を十分に時間をとって（1泊2日）交流し合おうということで始まりました。参加者も養護学校の教員から、大学の先生、地域の小・中学校、幼稚園の先生へと広がってきています。教員志望の学生さんたちにも教材研究や新教材の開発等にかける現場の先生方の熱気を体験的に感じてほしいので、今後は大学院生や大学生をも対象とした講座にしていきたいと考えています。

# 自然へ、自然に

美術教育非常勤講師　建　田　良　策

木漆工芸という仕事柄、「自然」について考えたり感じたりすることが多い。

素材である木を使う時、その木がどんな樹種か、樹齢はどれ位か、どんな成育過程を経てきたか、またどんな切られ方をしたかに依って性質を推測し使用目的を選ぶ。たとえば杉ひとつをとってみても決して均一な性質を持っている訳ではない。生え育った土地の気候や土壌によって色や木目、重さや性質にかなりの差が有る。一般的には条件の悪い、栄養の少ない土地で育った木は年輪の巾が狭く、しまった材で木目もおもしろいものが出る。

たまに山に行った時など、つい大径木や素材になりそうかというところで樹木を見てしまう。それは作り手として当然の事だとは思うのだけれど、何か後ろめたい感覚が残る。一つには生命体である樹木を殺して使うこと、あるいはその木の周囲の環境を乱してしまうこと。しかしそれよりいつも強く感じるのは、その木の「生きている木」としての美しさ以上の物が、それを材料として作り出せるかという事だ。言い換えれば、木の持っている「自然」という力を損なわずに作品化できるかという事だ。

それはただ単に樹皮の付いたままの材や丸太のままの材など木のありのままの形を使うという事ではない。人との関わりあいの中でより人の生活に合った形にして木の力を活かせるかという事だ。

木材を加工していると決して思い通りにはならないと思い知らされることが多い。木は単なる素材として扱える代物ではないと思う。

木を扱っていると、さまざまな生物との関わり合いがあるのに気が付く。立ち木である時、色々な虫や鳥、植物や獣がその木を通じて生きている。葉っぱや花や実を食べるもの、樹液を吸うもの、卵を産み付けるもの、巣を作るもの、伐り倒されたあと材を食べるもの、菌類などの様に分解して栄養とするもの。それらすべていとおしく思える。それらも含めて作品化したいと考えている。作品を通してその向うに森が見えるようなもの作りが出来たらと考えている。

自然に向かって自分の意思を通すことなど出来はしない。「自然」に対してはもっと自分自身「自然体」で接しなければと思う。自然にとけ込み、木や草、虫や鳥やけものに同化し受け入れられるような生活をして、そのなかで制作したいと思う。

# 「自立」に思うこと

障害児教育非常勤講師　高　田　　薫

「自立」なるものは何なのか？この数年、親から経済的な援助を受けることはなくなり、自分なりにものを考えられるようになってはきている。しかしながら、わからないことがあれば親に相談を持ちかける。親を介護するようになっても何らかの形で頼りにするだろうし、親が死んでからでも、生前の言動は私の行動を決める指針として生き続けていくのである。さらに言えば、なんとか食べていくことができるのは、周囲の方が仕事を世話してくださるからである。

「自立」という言葉は、障害者の自立、高齢者の自立、あるいはニートやパラサイトシングルなど私たち世代の自立の問題などに対して頻繁に使われる割には、どういう状態を指しているのかは曖昧である。自立できた状態とは多義的かつ自立すべきとみなされる対象の属性に依存する場合が多いからではないだろうか。例えば、着替えや食事の自立は、2～3歳の子どもにとっては重要なことだが、私の世代では、重要とはみなされない。

「自立＝ひとりでできる」と認識されがちであるが、これは問題の図と地のうち、図に当たる部分のみ見た時の定義である。地の部分である「ひとりでできる」を満たす要件を補って再定義するならば、「ある人生の局面にあるＡさんが、与えられた物理的環境および人間関係の中で、能力を発揮し、充実した生活を送れること」となるであろうか。

今書いた再定義は、教育や福祉の分野では常識であろうが、あえて取り上げたのは、駆け出しの教育者として他人ごとではないからである。学生には多くのことをできるようになってもらいたいのだが、行動面、性格面のみならず、能力面においても、学生の個性は幅広い。幅広い個性に対応するような授業をと考えていくと、図の部分だけ見ていても難しいということが、この半年で分かってきた。大学生ともなれば、自分の能力を発揮できる場や人間関係を見つけ出すのは自分たちの責任である。それでも授業内では多くの学生が「できるようになる」環境を作り出すのは私たちの責任であろう。学生がその時々で自立できるかは、私たち教育者が学生の現在や将来の状況を生き生きとイメージし、今現在彼らに対して何を準備してやれるかということにかかっている。

教育の難しさを認識する次第である。

# 本当に貴重な２年間

京都市立上高野小学校　教諭　　奥　野　利　一
（学校教育専攻学校教育専修　平成１６年度修了生）

京都教育大学を卒業して14年。小学校の先生をしていた私が、また京都教育大学で大学院生として勉強する機会を得ることになりました。大学を卒業してから小学校教諭として毎日子ども達と一緒に過ごしてきた日々は、私にとって貴重な財産でしたが、今回、大学院生として改めて教育について研究することができた2年間は、本当に貴重な時間だったと感じています。

私が大学院生として過ごした2年間で一番勉強になったことは、教育学という学問領域において、今どのようなことが問題になっていて、どのような議論がかわされているのかといったことをじっくりと見つめ、それに対して自分なりの考えを深めることができたということです。小学校で学級担任をしていると、自分の目の前にいる子ども達がどのように成長していくか、また、その成長をどのように支援することができるかといったことにどうしても目が向きます。また、学級担任としての実務にも追われ、その結果、教育学の最近の動向をじっくりと探ることはできにくくなりがちです。私にとっての大学院での研究生活は、今までの自分の教育実践を振り返るとともに、今後の実践に何が必要かを考えるための非常に貴重なものになりました。また、大学院の授業での専門的な内容や、同じ現職教員の大学院生との議論が、自分の教師としての力量を高めるために役立ったことも言うまでもありません。

現在は、小学校で3年生の担任をしています。かわいい子ども達を目の前にして、日々悪戦苦闘する毎日に戻っています。けれども、大学院の2年間で学んだことを常に意識し、教育学の動向に対してアンテナを張り巡らしながら、自分なりの教育実践を進めていくことができればと考えています。学び続ける教師であることが、きっと目の前の子ども達の学び続ける姿勢にもつながっていくと信じて･･･。

# 心を動かす授業を目指して

大阪女学院中学高等学校教員　　加　茂　祐　介
（数理自然教育系理科教育専攻　平成１６年度卒業生）

学校での一日はあっという間です。授業はもちろん、学年会議、校務分掌の活動や会議もこなしつつ、クラブ指導にも出て、そして生徒の質問にもしっかりと応えなければなりません。それが終わればすぐに次の授業準備です。時間の無さは教育実習とは比べものになりません。それでも、大学で経験した計6週間という他大学と比べれば非常に長い教育実習や、実際の学校行事に参加する参加実習などは、学生でありながら様々な角度から学校現場を見ることができ、教師の毎日の生活を体感することができる貴重な機会でした。

現在担当している授業は、中学校理科1分野と高校化学の授業です。一日で中学生と高校生を教えるというのは面白いものです。ただ、女子中高生のなかでは「理系の教科を苦手」とする意識が強い生徒が多いのも確かです。さらに生徒の多くはクラブや受験に追われる忙しい生活の中で少しずつ「なぜだろう」と考える余裕もなくなっているように感じます。進学を考えたとき、あるレベルの点数を取ることは必要になるけれど、学ぶということに興味を持つことができれば、勉強や受験はそれほど苦しいものではないと私は考えています。理科を学ぶことに興味を持つには、様々な事に対して「なぜだろう」と思う心を抱くことが必須だと常に考えています。そのようなことから、授業では当たり前と思っている身の周りの様々なことが実はとても不思議なことばかり、ということに気付くような授業を実践しようと心がけています。「まずは自分が興味を持って感性を磨く」という姿勢や、「なぜだろうと思う心」を大切にした実験や講義の実践、さらには大人になるにつれて失いがちな「素朴な疑問を持つ心」を授業の中で訴えかけることの重要性、これらはすべて大学での授業や実験、卒業研究を進める中で学んだものです。これらを、完璧に実践するにはまだまだ経験も足りませんが、理科を教える上でとても大切なことを学べたと思っています。

今後も、自分自身が自然の様々なことに疑問を持ち続け、少しずつでも生徒の「心」を動かすことができるような授業ができるよう頑張っていこうと思います。

陸上部でのクラブ指導中の1コマ。生徒とともに走る。

# 原稿募集！

皆さんからのご意見や投稿を広く募集いたします。とりわけ地域の皆さんや学生の皆さんからの投稿や企画等歓迎します。建設的なものであれば、紙面の許す限り掲載したいと思っておりますので、どんどん送って下さい。原稿等には締切期限を設けておりません。ただし、採用の可否は委員会で判断いたします。

【投稿要領】

○身近なできごと、ちょっとした発見、楽しかったこと等、テーマは自由です。
（テーマ例：研究室紹介・旅行記・趣味・体験談・提言等）

○写真・イラストも募集します。タイトルまたは説明文を付けて下さい。

○送付先
タイトル、氏名、連絡先を明記の上、下記へお送り下さい。電子メールでも構いません。

〒 612-8522
京都市伏見区深草藤森町 1番地
京都教育大学総務課気付「地域連携・広報委員会」
E-mail: kouhou@kyokyo-u.ac.jp

## 第 116 号の読者の皆さまへ

kyokyoをお読みいただきありがとうございました。
読まれた記事のご感想や広報誌のあり方などのご意見を、お聞かせ下さいませんか？
あなたのご意見を、今後の企画・編集の参考にさせていただきたいと思いますので、上記の連絡先にお寄せ下さい。

## 116 号編集後記

広報 116号をお届けいたします。本号の特集は『実践的指導力を培う新しい実地教育科目－教育課題研究実地演習・学校インターンシップ研修－』です。教員養成を進める大学としてこの実地教育の取り組みは大きな教育変革につながる内容を持っています。このような取り組みと前後して、本学は学部の平成 18年度改組を決定いたしました。それは総合科学課程の学生募集を停止し、学部定員 300名全体を学校教育教員養成課程とするものです。このように学部を教員養成に一本化し、力を結集することによって、より実践力に富む学校教員を養成することに努力することを大学として決意したことになります。本号がそうした教育改革のひとつの礎となることを期待したいと思います。

学内の先生方、センター、附属学校の取り組みも投稿していただき、本学らしさのあふれる広報になりました。執筆の皆様に感謝いたします。

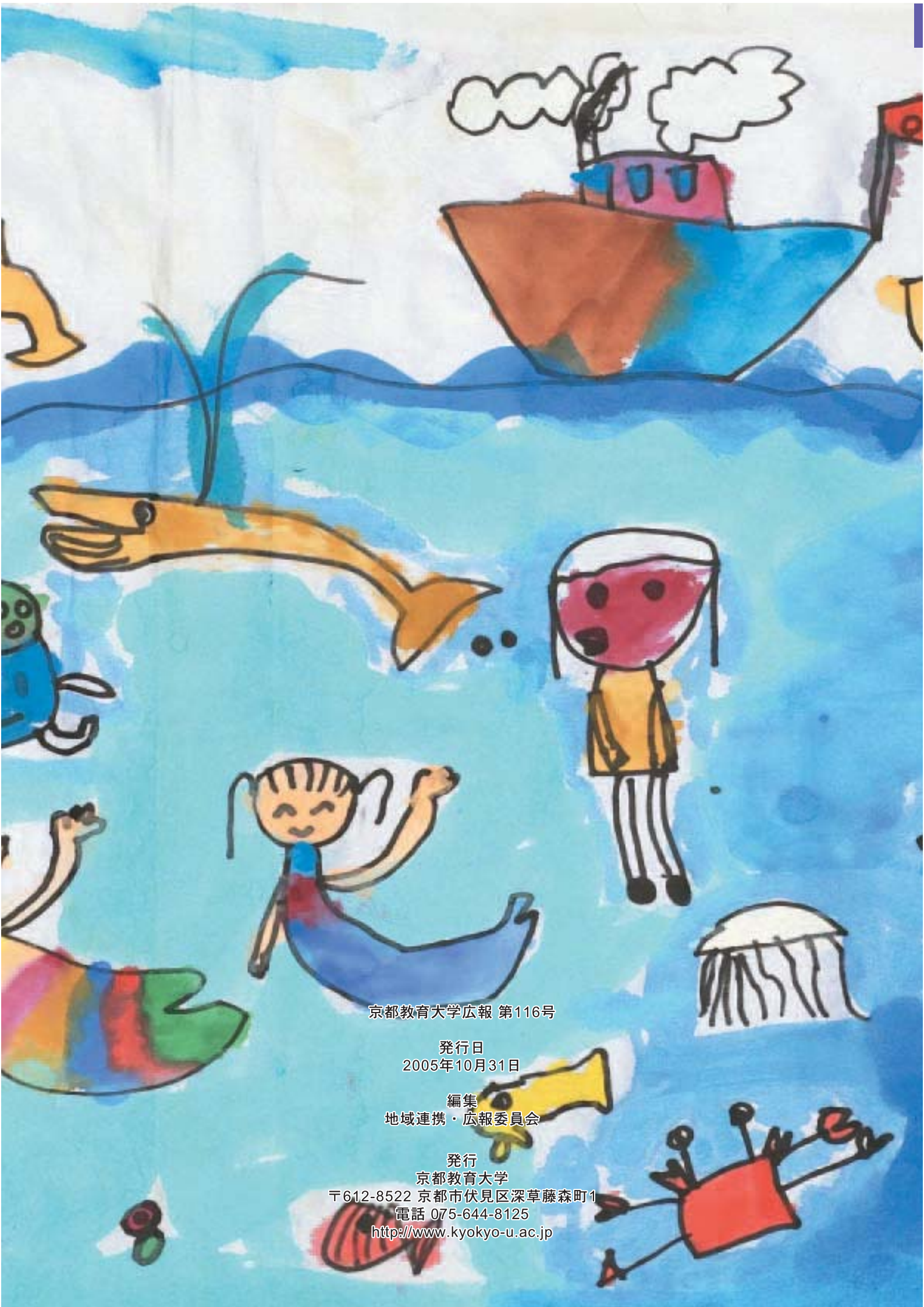
なお表紙は附属幼稚園のうきた ゆうきさん、こうじな えいかさんの作品です。夢あふれる絵をお楽しみください。

地域連携・広報委員会委員長　武蔵野　實

京都教育大学

地域連携・広報委員会

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 委 員 長 | 武蔵野　實 | | | |
| 副委員長 | 谷口　淳一 | | | |
| 委　　員 | 広木　正紀 | 田中　里志 | 谷川　とみ子 | 浅井　和行 |
| | 荒木　光 | 安江　勉 | 宇都宮　博 | 宇野　和樹 |
| 事務担当 | 総務課 | | | |



京都教育大学広報 第116号

発行日
2005年10月31日

編集
地域連携・広報委員会

発行
京都教育大学
〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1
電話 075-644-8125
http://www.kyokyo-u.ac.jp